

## 日中戦争期における豆腐行商人の生活

——豆腐店主・入山音治郎の日誌を素材に——

西村 卓

### はじめに

本稿の目的は、京都市上京区東魚屋町で豆腐製造と行商を家業とする入山音治郎という人物の書き残した「家計日誌」をもとに、日中戦争期の「高揚」のなか、京都市中の一家族がどのような生活をおくっていたのかを明らかにすることである。それは、「生きる」「楽しむ」「交流する」「支える」という日常の家族と地域コミュニティの側から戦争を見据えることでもある。

分析の対象とした日誌は、「家計日誌」と銘打たれた縦一九cm横二三cmの冊子の形をとっている。昭和二三（一九三八）年のものである。この意匠は当時的大阪貯蓄銀行が考案したものとされ、巻頭部分には、以下の目次にあげるような、文字通り家計をやりくりする場合の便利帳という内容が掲載されている。さらに日誌は上下段に分かれ、上段に日記、下段にその日の家計支出が記載できるような体裁となっている。その目次は以下のようなものである。すなわち「知っておく可き銀行常識」「複利終価表」「毎日拾銭宛預け」と「毎月一円宛積立て」と「年齢早見表」「年次早見表」「鉄

道規則摘要」「国立公園十二ヶ所」「敬神の旅」「著名の温泉」「郵便諸規則」「メートル法」「家庭欄」「贈答品控」「勸業債券抽籤月一覽表」「貯金通帳覚え書」「住所録」「本年中の重要記録」である。「家庭欄」はさらに「赤ン坊十二ヶ月」「幼児の食物」「子供の育て方」「健康体計数」「家庭常備薬」「ガスの上手な使用法」「汚点拔きの秘訣」「コーヒの上手な入れ方」「家庭儀式」「贈答の栞」「家庭防空の知識」と細かく分かれ掲載されている。この日誌が銀行によつて考案されていることから貯蓄への誘導は当然としても、これらの目次自体、時代の一つの表象であり、この日誌を利用し記述していくこの時代の家族にとつての必要事項であつたろう。日中戦争期であつたことから「家庭欄」の「家庭防空の知識」などは、「一、防護上必要なる平素の準備」「二、防空命令が下つてからの支度」「三、警戒警報が下つたら」「四、空襲警報が下つたら」「五、毒ガス警報があつたら」「六、防空三則」と事細かな記述があることはそのことを示している。なお、日誌は無記述の日が一二四日分、特に六月、八月の後半、十一月、十二月に多く見られ、全体としてはほぼ四か月分ある。

この日誌が書かれた前年、昭和一二（一九三七）年六月に第一次近衛文麿内閣が成立した。その翌月に盧溝橋で日中両軍が衝突し、日中戦争の発端となつた。その後、日本軍の華北での総攻撃、陸軍の上海派遣、日本海軍による全中国沿岸部の封鎖宣言、一二月には日本軍は南京を占領した。昭和一二（一九三八）年に入り、国内で四月に国家総動員法が公布され、国内的に戦時体制が着々と作られるなか、日本軍は一〇月に華南バイアス湾に上陸し、広東そして武漢三鎮を占領するにいたつたのである。この報を受けて、音治郎は一〇月一四日と二七日の日誌に「バイヤス湾<sup>（バイアス）</sup>上陸す」、「午後五時三十分、武漢三鎮を完全に攻略す」と書き記し、その「高揚」のなか、二八日に音治郎は下御霊神社、護王神社に参拝し、夕方の提灯行列にも参加している。日本はその後、昭和一六（一九四一）年一二月八日の

日米開戦（太平洋戦争）にむけて戦争拡大の道をひた走るのである。

時代は文字通り「いけいけドンドン」の戦況を示していたと、少なくとも当時の日本人には知らされていた。そして、京都市民にも。戦時下の家族の様子を、たった一年とはいえ書き綴られた日誌を通して、様々な関係のなかで明らかにしたい。戦争が日常化し、日常が戦争化していく様子、言い換えれば、戦争が生活のなかに浸透し、戦争を常に意識しつつ生活が営まれる様子を、明らかにしたいのである。

## 一 入山音治郎とその家族

さて、この日誌の記述者である入山音治郎とその家族について触れておきたい。

第1図に示すように、音治郎は、明治二二（一八八九）年二月一三日に、父直次郎、母ハナの長男として京都市上京区で生を享ける。直次郎、ハナ夫婦は、そのあとタミ（長女、寅次郎（次男）、治三郎（三男）、竹三郎（四男）、和一郎（五男）、しづ（次女）、兼子（三女）、泰三（六男）と子どもをもうける。ただし、治三郎は出生後一年未満（明治三〇年九月八日没）で、竹三郎は七歳八カ月（明治四〇年一月二五日没）で早世している。

妻とめ（滋賀県坂田郡長浜町にて父山田梅吉、母すての四女として生れる）とは、大正一〇（一九二一）年一〇月に結婚をし、好子（長女）、博一（長男）、克太良（次男）、道夫（三男）、エイ子（次女）と五人の子どもをもうける。しかし、長男博一は二カ月半ほど（大正一四年三月二日没）で早世している。それゆえ、克太良が実質的には長男として音治郎家で育てられる。

音治郎は父直次郎から昭和一二（一九三七）年三月に満四七歳で家督を相続し戸主となる。その意味では、本稿で



分析する日誌は、家督相続の翌年、音治郎が満四八歳の時に記されたものである。

父直次郎は、本籍地を上京区榎木町通油小路西入西山崎町一九番戸、上京区榎木町通油小路東入東魚屋町三四八番地と換え、昭和三（一九二八）年七月に現在の入山家の住所である上京区榎木町通油小路東入東魚屋町三四七番地に転籍している。昭和一七（一九七二）年一二月に満七九歳で没しているが、直次郎の妻ハナは大正一一（一九二二）年二月に満五二歳で先立っている。

父直次郎の子どもたちの出生後の来し方であるが、長女タミは大正六（一九一七）年九月に本籍地が上京区小川通丸太町上ル上鍛冶町の山田安之助と婚姻<sup>①</sup>、次男寅次郎は本籍地上京区丸太町間之町西入ル関東屋町の寺田家（ハナの入山家入籍により、廃家となっていた）の家督を相続、五男和一郎は昭和三（一九二八）年に分家をしている。分家にあたって、上京区榎木町通油小路東入ル東魚屋町三四七・三四八番地の二つの宅地のうち、直次郎の本籍地を三四八番地から三四七番地に移し、三四八番地を和一郎の本籍地とした。三女兼子は昭和六（一九三一）年四月に本籍地愛媛県宇摩郡寒川村の木花正一と婚姻した<sup>②</sup>。

それゆえ、長男音治郎が父直次郎から家督を相続した時点では、入山音治郎家は、父直次郎、妻とめ、妹しづ（日誌中では静、静子などとも記される）、弟泰三、さらに子どもたちが四人という三世代にわたる家族を構成していた。そして家業としての豆腐屋は音治郎が継承していった。

和一郎家は昭和三（一九二八）年七月に分家し、本家の隣りに居を構え、妻せん（滋賀県野洲郡三上村出身）をむかえることになる<sup>③</sup>。その後長女喜美子を昭和四（一九二九）年六月にもうけ、続いて次女のお子、長男淳司、次男良造、三女知子、終戦の年一〇月に三男晴夫をもうけている。この日誌が記述された昭和一三（一九三八）年には、和一郎本人は出征しており、妻せんが留守を預かり、子どもたち五人とともに生活を営んでいたのである<sup>④</sup>。

## 二 入山家の日常生活

この日誌からは、さまざまな内容を読み取ることができる。入山家は家族・親戚内から出征兵士として音治郎の弟である和一郎と泰三<sup>⑥</sup>を送り出すが、彼らからの手紙を受け取り、彼らの無事に安堵する家族の息遣いや、戦時下の「高揚」のなかで、町内・近隣町・学区（滋野学区）から送り出される出征兵士の状況、市内各地の神社などで行われる武運長久祈願の催しや防空訓練の状況など、日中戦争期における家族、地域の様子などが読み取れる。

しかし、それにとどまらず、豆腐行商人としての日々の商い、地域の年中行事を生活のリズムの軸に据えながら、家族一人一人の日々の生活が淡々と描かれている。法事などでの家族・親戚の交流、家族の娯楽に興じる様子、町行事、学区行事、子どもたちの所属する学校行事などへの参加、戦時期とはいえ、いやむしろ戦時期だからこそ、「生きる」「楽しむ」「交流する」「支える」という生活者の「息づかい」を感じ取ることができるのである。

## 1 豆腐製造・行商

豆腐製造・行商の日常について、日誌に記載された記事をまず拾い上げよう。

- ・ 一月 四日（火） 仕事始め。
- ・ 一月 七日（金） 商い休み。
- ・ 一月 二〇日（木） 豆腐商業組合の新年会。
- ・ 一月 二二日（土） 朝巡り休む。
- ・ 一月 二七日（木） 巡り休み、府庁より焼き六五注文。

・二月 二六日(土) 巡り休み、一日寝る。

・三月 二二日(火) 克太良卒業式につき、午前の巡り休みにして式に出席。

・四月 一〇日(日) 上長者町豆腐商奥西氏、中立売署第二部組合経費収集に来る三、四月分。

・四月 一二日(火) 健康診断のために午前の巡り休み。

・四月 二七日(水) 製品の検量があった。白一三〇匁、揚げ五枚で二一五匁(一枚四三匁)、焼き〇。

・五月 一八日(水) 朝巡りに焼き二〇持ち出す、あげ、こんにゃくだめ。

・七月 七日(木) 今夏初めて絹こしをつくる。

・八月 三日(水) 蒸し暑い日であった、絹ごしだめ。

・九月 三日(土) 前日の残り揚げ三五ほどあり、この日白豆腐二四丁作り、焼豆腐止め。

・九月 四日(日) 前日(四明嶽より横川元三大師参詣)の疲労のため、午前の巡り休み。

・九月 一三日(火) 行商の途中得意先から出征の泰三・和一郎に対する心遣い。

・九月 一五日(木) 午後の行商休み。

・九月 一八日(日) 今日白地大釜二つ、竜山大豆使用する、よく実がのる。

・一〇月 一日(土) 防空訓練で空襲に付き、行商一時間ほど中止。

豆腐製造・行商は、入山音治郎家にとっては家業としての日常であり、毎日毎日の記録は、仕込み・製造の数値として残され、行商の様子などは逐一記録されていない。長男克太良の卒業式出席や、健康診断などのため行商巡回を休んだり、前日の横山元三大師を参拝した疲れのために休んだりしているが、豆腐製造・行商は土日も含めて、黙々とこなしている。行商の折に得意先から、出征中の和一郎、泰三の安否への気遣いに感謝の気持ちから、「今日行商

を二三日間休んだので、行き先の得意先にて出征両兄弟の安否を気つかつて、三人もお尋ねくだしました」(九月一三日付記事、以下月日のみ)と書き記し、さらに、行商中に防空訓練で空襲警報があり、行商を一時間ほど中止しなければならず、「こまつた」(一〇月一日)と書き記しているなど、家業への戦争の影響の一端が垣間見られる。

豆腐製造 行商を示す数字に関しては符丁のように記されており、なかなか正確に理解しがたいが、現当主の貴之氏への聞き取りなどを参考にしながら少し解説しておきたい。

この年には、一月四日を仕事始めとしている。そこに記述された数字は、「白大一、揚大一」となっている。「白」は白豆腐を意味し、「揚」は油揚げ(薄切りにした豆腐を油で揚げたもの)のことである。「大」とは大豆を四升仕込む大釜のことで、一釜分白豆腐用に、さらに一釜分油揚げ用に仕込み、製造したことを示す。

また、八月五日の記事では、「あけ 小二 100、白 大二 16 16 2、焼 25 飛龍頭 16」となっている。この意味する内容は、油揚げ用に小釜(大豆二升仕込み)を二釜仕込み、一〇〇枚の油揚げを製造し、また白豆腐用に大釜二釜を仕込み、一六丁ずつの白豆腐と他に二丁、そして焼き豆腐(焼き豆腐は、白豆腐として製造したものから焼き豆腐用に切り出し、それに炭火で焼きを入れたものである)を二五丁製造し、さらに飛龍頭(ひろうす、がんもどきのことで、水気をしぼった豆腐に、すったヤマイモ、ニンジン、ゴボウ、シイタケ、コンブ、ギンナンなどを混ぜ合わせて丸く成型し油で揚げたものである。前日残りの白豆腐の水気を取り製造するのが一般的である)を一六個製造したことがわかる。

九月一六日の記事では、「あけ 小二 八十四 20、白 大二 16 14 0、やき 20 0」となっているが、これは、油揚げ用に小釜で大豆を二釜仕込み、八四枚の揚げを製造、二〇枚が余つたこと、さらに白豆腐用として大釜で二釜炊き、一釜分として白豆腐一六丁、焼き豆腐二〇丁を製造、もう一釜分として白豆腐一四丁、焼き豆腐二〇丁を製造し、それぞれ売れ残りがなかったことを示す。この日誌に登場する他の行商品としては、こんにゃく、絹ご



し豆腐、キツネあげが登場するが、常時販売していたわけではなかった。

九月末ごろからは、数字の上に「白」「ヤ」「上」などのルビが添え書きされたり、数字が抹消されたりして複雑になり、数字の合算が合わない場合もあり、今後の分析に待ちたい。

起床に関しては、早いときには午前四時半、遅いときは午前七時の場合もあるが、おおよそ午前五時から六時までの間であり、それから豆腐製造に取り掛かる。行商は、午前、午後一度ずつが常態であった。行商巡回経路に関しては、本日誌からは判然としないが、おそらく同業者との棲み分けがされていたようであるが、九月一八日の記事に、「福助は川新で揚豆腐買入れて居る由、畳屋細君より聞く」とあるように、顧客の都合で行商相手を替える場合もあったようである。

## 2 家族・親戚のネットワークとその交流

二月二日に天室妙帷信女（俗名ハナ、音治郎母）の一七回忌の法要が、入山家の菩提寺である曹洞宗慈眼寺（京都市上京区出水通七本松東入ル）で執り行われた。

列席者として、音治郎・とめ夫婦、山田タミ（音治郎妹）とその夫安之助、兼子（音治郎妹）婚家である木花家から木花正一（兼子の夫）と木花央雄、音治郎の子である好子、エイ子、道夫、分家である和一郎家から淳司、喜美子などが列席している。父直次郎の名と、分家和一郎の妻せん（この日誌では仙と記される時もある）、さらにはハナの実家である寺田家を家督相続した寅次郎の名が見られないが理由は不明である。仕出しは同町入山家向いの「二和佐」からとられた。この法要に先立って、父直次郎は親戚へ「茶の子」（粗供養）配りに出向いている（二月一九日、二〇日）。また、法事終了後も「茶の子」を送っている。

音治郎の母の法要ということで、音治郎の家族、分家と一郎の家族、そして兄弟姉妹とその婚家からの列席である。実家である音次郎家と分家と一郎家、さらには婚家である山田家、木花家、その他との交流が、法事にとどまらず日常的に行われていたことは他の記事からも確認できる。

年始の礼には、木花正一（兼子婚家）と山田安之助（たみ婚家）が音次郎家を訪問している。贈答のやり取りも多い。山田安之助家からはお膳（二月一七日）、折り詰菓子（二月三十一日）、甘鯛（二月二日）、五色寿司（三月三日 ひな祭り）、彼岸の供養として五目寿司（九月二十五日）、鮎鶴の折り詰（一〇月一五日）、木花家から銭幸饅頭（九月二十五日）、木花英雄の誕生日で赤飯を炊き持参している（九月二七日）、山田安之助家の以前女中であつたはる（福井県鯖江）が来訪（八月五日）、寺田家を相続した寅次郎（この年には住所が兵庫県揖保郡龍野町横町となっている）から、鮎の煮込みが送られてきた（一〇月一一日）。

音治郎の妻とめの実家・親戚である滋賀県坂田郡長浜町の山田家、門川家とは、次にみられるように、法事をはじめ頻繁な交流があつた。

・ 一月 七日（金） とめ長浜に行く、門川氏訪問見舞い。

・ 一月 八日（土） 門川初太郎氏死去、葬儀に行く。

・ 一月 九日（日） 同前。

・ 一月 一五日（土） 長浜の門川氏からみかん寄贈。

・ 二月 一一日（金） 長浜の門川ミネ上京のついでに、好子とエイ子を連れて堀川の活動写真を観にいく。

・ 三月 八日（火） 門川様からかぶら漬送り来る。

・ 四月 三日（日） 父、好子、克太良、京都駅一〇時発の列車で長浜へ向かう。

- ・ 四月 六日(水) 父、克太良、好子、長浜から帰宅。
- ・ 四月 一四日(木) 長浜の山田寅三(とめ兄、山田家当主) 家行く。
- ・ 五月 六日(金) 門川氏より漬物来る。
- ・ 九月 八日(木) 長浜門川氏から奈良漬送り来る。
- ・ 九月 九日(金) 門川ふじ急病死亡、長浜に向かう。
- ・ 九月 一〇日(土) 午前一〇時京都駅発の列車で長浜門川氏へ向かう、山田宅へ一泊。
- ・ 九月 一日(日) 午後四時、門川氏自宅出棺。
- ・ 九月 一四日(水) 門川氏より会葬礼状。

次に、分家和一郎妻せんの実家(滋賀県野洲郡三上村)との交流である。和一郎家では一家の戸主が出征していると  
いうことで、次にみるように、せんの実家から母親が何度となく家を訪ね、手伝いをしている。

- ・ 二月 二六日(土) 隣りせん母親来る。
- ・ 四月 一二日(火) 隣り清吉、徴兵検査のため野洲へ帰る。
- ・ 四月 一三日(火) 隣り淳司、野洲より帰宅。清吉帰る。
- ・ 四月 二七日(水) 隣りせん、淳司、良造を従え実家野洲へ日帰り。
- ・ 五月 一四日(土) 父直次郎が野洲の祭りに淳司、エイ子を連れていく。
- ・ 五月 一六日(月) せんの母親が手伝いに来る。
- ・ 九月 一五日(木) せん母来る、自家造り醤油五合、小芋少し土産として持参する。
- ・ 九月 二二日(木) せん母三上村へ帰宅。

・一〇月一三日(木) 和一郎家に野洲から松茸とどく、少し貰う。

・一〇月一六日(日) セン母親来る。

以上のように、入山音治郎家は家業の豆腐製造・行商を営みながら、隣家の弟和一郎家、同町内に居住している山田家(タミ婚家)、木花家(兼子婚家)、妻とめの実家である山田家とその親戚の門川家、さらには、隣家 and 一郎の妻せんの実家と日常的に親密に交流をしている様子を知ることができる。家族・親戚としてネットワークを作り、相互に交流し支えあっている姿は、当時の日常的な家族・親戚のあり方を示しているといえるであろう。

### 3 家族の日々の食事

次に、日誌に記述されている限りでの入山音治郎家の食卓の様子をうかがってみよう。

・一月 七日(金) かしわ。

・二月 一日(火) 香の物、からし漬、たらの子、塩鮭。

・二月 一日(金) 千切小芋揚、いわし焼、こうじ漬。

・二月 一二日(土) 作り身、ねぎ、焼豆腐、あげ(豆腐)。

・二月 一三日(月) あぜかぶら、黒豆、うずら豆。

・二月 一四日(月) こんにゃく、あげ(豆腐)、ねぎ、鯖、湯葉。

・二月 一五日(火) おから、青豆、焼(豆腐)、あげ(豆腐)、ねぎ。

・二月 一六日(水) ぐじ(アマダイ)とあおりいか、天婦羅。

・二月 一七日(木) はたけ菜、あげ(豆腐)、塩鮭。

- ・二月 一八日(金) 白味噌ねぎ汁、千切、揚豆腐。
- ・二月 一九日(土) 塩鮭、桜干し(イワシやキスを開いてみりん醤油に漬け、干したもの)。
- ・二月 二三日(水) 干し鰯、青えんどう豆。
- ・二月 二四日(木) まぐろすき焼。
- ・四月 一日(月) わかめ味噌汁、蒲鉾、ふき(蒔)。
- ・八月 一日(月) なすび(茄)、あげ(豆腐)、こんにゃく白あえ、ウナギの蒲焼。
- ・八月 二日(火) らっきよ、なすび(茄)、あげ豆腐。
- ・八月 四日(木) 湯葉、干瓢、あじ(鰯)、なすび(茄)、あげ(豆腐)。
- ・八月 五日(金) 奴豆腐、天ぷら、野菜物。
- ・八月 七日(日) 赤いも(芋)、いんげ(インゲン) 豆、マナガツオ。
- ・九月 一五日(木) あげ(豆腐)、アラメ、赤味噌汁、白豆腐、はも(鰯) 切落。
- ・九月 一六日(金) 味噌汁(さつま芋入り)、小芋、焼とうふ。
- ・九月 一七日(土) 青菜、あげ(豆腐)、味噌汁、はも(鰯) 切落し、じゃが芋、薩摩芋。
- ・九月 一八日(日) なすび(茄)、揚げ(豆腐)、鱈(さわら)のてり焼。
- ・九月 一九日(月) 三度豆、あげ(豆腐)、とろろ汁、玉子焼。
- ・九月 二〇日(火) 隠元豆、三度豆、あげ(豆腐)、なすび、斗六豆(大福豆)。
- ・九月 二一日(水) 味噌汁とうふ入、自家製天婦羅、鰻。
- ・九月 二二日(木) 青菜、あげ、鰯のてり焼、味噌汁。

- ・ 九月 二三日 (金) 白豆腐のやつこ、浅草のり、湯葉と百合根のみそ汁、鰻(むつ)、斗六豆。
- ・ 九月 二四日 (土) みそ汁、こんにゃく白和え。
- ・ 九月 二五日 (日) とうふ汁(この日はお彼岸の供養として、五目寿司をもらっている)。
- ・ 九月 二六日 (月) 青菜、鯖、青菜とあげ。
- ・ 九月 二七日 (火) 青菜、あげ、湯葉、玉子のお汁。
- ・ 九月 二八日 (水) うの花(おから料理)、黒豆。
- ・ 九月 二九日 (木) 糸こんにゃく、あげ(豆腐)、しじみ汁、あじ(鰯)付焼、かぶらの浅漬け。
- ・ 九月 三〇日 (金) ずいき芋、あげ(豆腐)、塩鯖。
- ・ 一〇月 一日 (土) 塩鯖、あわび貝、松茸汁。
- ・ 一〇月 二日 (日) ずいき芋、鯛、やきとうふ(焼き豆腐)、松茸とうふ汁。
- ・ 一〇月 五日 (水) 味噌汁とうふ、ずいき芋。
- ・ 一〇月 六日 (木) あらめ、やつこ豆腐、あじ(鰯)、斗六豆。
- ・ 一〇月 七日 (金) やきあげ甘煮、玉子とじ。
- ・ 一〇月 八日 (土) ずいき芋、うなぎかば焼。
- ・ 一〇月 一五日 (土) 豆腐味噌汁、焼松茸、あじ(鰯)。
- ・ 一二月 一日 (火) 味噌汁 若芽、焼(豆腐)、ほうれん草、桜ぼし。

質素な食事とはいえ、家業の豆腐製品を材料として使いながら、思いのほか豊富な食材が食卓を賑わせている。土用の丑の日のウナギの蒲焼(八月一日)、鰻料理、鰯、鯖、鮭などの魚類、さらには豆類、野菜類など、季節の食材を

取り入れている様子がうかがえる。生活必需品の統制は、太平洋戦争開戦（昭和一六年二月八日）をはさんで徐々に強化されていくが、配給品目として木炭、米、砂糖、醬油、味噌、塩、マッチなどに始まり、さらには乳製品、綿製品、牛肉、乾麺、小麦粉、豆腐にまで及ぶのである。<sup>(6)</sup> 国家総動員体制が強化されていくなか、生活必需品への統制は食卓にならぶ品目を減らし、貧しくしていったであろうが、昭和一三（一九三八）年の入山家の食卓は、いまだそれを感ぜさせない。

#### 4 家族と銭湯

入山家は職住一体型の住居環境であり、当時いまだ内湯が一般的でなかったことから、入山家も外湯（銭湯）を利用していた。日誌には頻繁に家族の入湯の記事は見受けられないが、以下に見るような記事が散見できる。職住一体型の居住環境が一般的である地域にとって、銭湯は地域コミュニティの交流の場としての意味を持つ。「町のお風呂屋さんには、町と共に歩んできた歴史があり、町を映し出す鏡のような存在」<sup>(7)</sup>であり、「お風呂屋さんには世代をつなぐ共通体験」、「地域の中で育んできた歴史」があり、「暖簾の先には街が広がっていて、暖簾の内と外がしっかりと続いている」<sup>(8)</sup>といつてよいのである。

- ・二月 一日（火） 好子、エイ子入浴代として支出八錢。
- ・二月 七日（月） 入浴代として支出二四錢。
- ・二月 八日（火） 入浴代として支出一〇錢。
- ・二月 九日（水） 入浴代として支出一六錢。
- ・二月 十一日（金） 克太良、道夫入浴。

・二月 一二日(土) 入浴。

・二月 一六日(水) 好子、克太良、道夫、エイ子、入浴。

・五月 二日(月) 音治郎、とめ入浴代として支出、一〇銭。

・五月 四日(水) 克太良、道夫、好子、エイ子入浴代として支出、一五銭。

・九月 一八日(日) 玉の湯代替わり開業。

・九月 二二日(木) 下長者町白山湯へ入浴。

・九月 二三日(金) 今日初めて代替わり玉の湯へ入浴。

・九月 二四日(土) 子ども全員入浴。

入浴料に関しては、昭和二三(一九三八)年にその値上げ問題が組上に上ったことを受けて、『京都日出新聞』は次のように伝えている。

「湯銭値上げ再陳情 湯場組合代表が保安課へ 依然首傾げる当局

本誌特報の如く府浴場組合聯合会は当局の国策に順応し、燃料節約の建前から朝風呂を廃止し営業の合理化を図つてゐたが、燃料の暴騰および浴客の減少から極度の営業不振に陥り、現在の料金では廃業の已むなきに至ると叫ぶものもあり、六百の業者挙げて湯銭の値上げを嘆願、府当局でも市内各署保安係員を督励して鋭意営業状態調査を行つてゐたが、森組合長及び森澤浴場青年団長の両氏は、十四日午前十一時府保安課に藤井課長を訪ひ、種々窮状を訴へたのち、現料金大人五銭を六銭に、小人四銭に、乳児を三銭に、都合一銭宛の値上げ許可促進方を陳情嘆願するところがあつた。」



燃料の高騰と入浴客減少の現状から、現料金をそれぞれ一銭宛値上げして、大人六銭、小人四銭、乳児三銭にしたという嘆願を府浴場組合聯合会は府当局に提出したというのである。これによれば、現料金は大人五銭に対して、小人三銭、乳児二銭ということになる。

この年の音治郎家の子どもたちは、誕生日をむかえて、それぞれ満年齢で好子（同志社高等女子部生徒）が一六歳、克太良（松原商務学校生徒）が一二歳、道夫（滋野尋常小学校児童）が九歳、エイ子（未就学児）が六歳であることを考えれば、好子、克太良二人は大人料金、道夫は小人料金、エイ子は乳児料金となるが、二月一日の入湯料が好子とエイ子二人で七銭の八銭であり、理由は不明である。五月四日の子どもたち四人で一五銭の支出であるが、好子、克太良が大人料金合わせて一〇銭、道夫が小人料金で三銭とエイ子は乳児料金で二銭とすると、合計一五銭となる。入湯した銭湯の名前が「下長者町白山湯」「玉の湯」と二軒出てくるが、滋野学区の北の境が下長者町通であることから、前者はこの通りに面した銭湯と推測できるが所在は確認できなかった。後者は油小路下立売通下ル東側にあり、入山家から歩いて数分のところにあった（現在は廃業）。どちらにしても、六歳のエイ子を含めた子どもたちだけで入湯した日もあることからすれば、行きつけの銭湯は近所であったと考えるのが普通であろう。

## 5 家族の神社仏閣参詣と行楽・娯楽

父直次郎をはじめ、家族の行楽を兼ねた神社仏閣への参詣が日誌記事中に多く見られる。京都における年中行事を軸にして、孫たちを伴った直次郎の祖父としての思いを彷彿とさせる。家族それぞれの日常での娯楽についてもみてみたい。

まず、父直次郎の神社仏閣参詣についてである。

- ・ 一月 六日(木) 父、たみ、摩気神社(京都府船井郡園部町竹井宮ノ谷) 参詣。
- ・ 一月 二三日(日) 父、真如堂(真正極楽寺…京都市左京区浄土寺真如町) 参詣。
- ・ 二月 二日(水) 父、道夫を伴い吉田神社(京都市左京区吉田神楽岡町) 参拝。
- ・ 二月 一六日(水) 父、寺町遣迎院(京都市上京区寺町通り広小路上ル北之辺町) へ行く。
- ・ 二月 一八日(金) 父、亡母の施餓鬼の日取り調整のため、宿坊慈眼寺(曹洞宗 入山音治郎家菩提寺…上京区出水通七本松東入七番町) に行く。
- ・ 三月 一五日(火) 父、嵯峨釈迦堂(京都市右京区嵯峨にある浄土宗の寺院) へ参詣。
- ・ 三月 一九日(土) 父と道夫、大津高山寺(所在不詳) へ参詣。
- ・ 四月 二日(土) 父、克太良、道夫、清水寺(京都市東山区清水、円山公園(京都市東山区円山町) へ。
- ・ 四月 一六日(土) 父、大和檀原神宮(奈良県高市郡畝傍町) へ参詣。
- ・ 四月 二五日(月) 父、道夫、北野天満宮(京都市上京区馬喰町) 参詣。
- ・ 五月 一五日(日) 父、好子、摩気神社へ祈願祭に行く。
- ・ 八月 八日(月) 父、克太良、道夫、慈眼寺、真如堂へ参詣。
- ・ 八月 一〇日(水) 父、タミ、摩気神社参詣。
- ・ 九月 一六日(金) 父、寺町遣迎院参詣。
- ・ 九月 二二日(水) 父、一〇時頃より東寺(京都市下京区九条町) 弘法様へ参詣。
- ・ 一〇月 二日(日) 父、園部摩気神社へ克太良と参詣。

・一〇月一九日（水） 父、とめ、静子、夷神社（京都市東山区大和大路通四条下ル小松町）へ参詣。

・一〇月二一日（金） 父、午後東寺へ参詣。

父直次郎は、この一年を通して数多くの神社仏閣に参詣している。摩気神社四回、真如堂二回、吉田神社一回、寺町遣迎院二回、慈眼寺一回、嵯峨釈迦堂一回、大津高山寺一回、清水寺一回、大和橿原神宮一回、北野天満宮一回、東寺二回、夷神社一回である。

直次郎一人の場合もあるが、娘、義娘のほか、孫たちと同伴する場合が多い。その心持ちとして、先祖への畏敬と神仏への崇拜を体で感じさせたいということであつたろうが、その一方では、行楽・娯楽の意味も兼ねていたのであろう。

二月二日に道夫を連れて吉田神社に参拝している。節分祭であり、『京都日出新聞』<sup>(10)</sup>の記事「明日節分 賑ふ<sub>レ</sub>戦捷<sub>レ</sub>の豆撒き」のなかで、洛中洛外の神社仏閣の賑わいを予想している。

『「福は内、鬼は外」の掛声も勇しく戦捷の春に迎へる三日の節分、神社仏閣何れも銃後国民の赤誠を披露して皇軍の武運長久祈願を兼ねて今年は一層賑ひさうである。（中略）この日、京洛においても例年のおぼけこそ見られないが、吉田神社をはじめ壬生寺、石清水八幡宮、伏見稻荷神社、山崎の聖天や京洛七福神の節分会の訪問者で二日の前日祭から洛中洛外は例年にない賑はひを呈することであらう。』

直次郎と道夫は、三日の節分祭当日でなく、二日の前日祭に参拝している。

四月二日（土）に克太良と道夫と同伴して清水寺に参詣した後、円山公園に行っているが、この日は日本晴れで桜

もそろそろ見頃の時期で、花見の行楽客も多く訪れていたことが想像される。

四月二五日(月)の北野天満宮への参拝は、「天神さん」といわれる天満宮の門前市が開かれ、屋台とともに骨董をはじめとした多くの露店が出て、その賑わいは京都市中の一つの名物である。また、直次郎は孫たちと同伴しなかったが、九月二一日(水)と一〇月二一日(金)の二回、東寺へ参詣している。毎月二一日に当時の門前で開催される「弘法さん」と呼ばれる市も、天満宮の「天神さん」と同じく屋台や骨董の露店が数多く並び、その賑わいは京都の風物詩である。

一〇月二〇日には京都夷(えびす)神社の大祭があり、一九日を「宵えびす」と呼び、二二日を「残り福」と呼ぶ。この三日間、大和大路四条下ル一帯は、商売繁盛を祈願する多くの人々の同神社への参詣で賑わうのである。さらに、この大祭<sup>11</sup>えびす講にちなみ、京都市中では「誓文払い」として、デパートを始め多くの商店が大安売りを行う。戦時下ゆえに、えびす講にさがけて行政側は、①売り出し期間の短縮、②景品付き販売の自粛、③正札明記のうえでの割引販売の励行、を行うように注意をうながした。<sup>12</sup>

新聞広告としては一〇月一〇日の「石川のゑびす講」(衣料品)に始まり、さまざまな商店が広告を出しているが、当時京都の大手百貨店である大丸が一二日～二三日、藤井大丸が一二日～二二日、高島屋が一二日～二二日、丸物が一二日～二三日をそれぞれの大売出し期間として何度となく新聞広告を出している。大丸は期間中一二日から一九日まで全館夜間営業とし、一七日(月曜日)も営業するとしている。藤井大丸も二二日(金曜日)まで夜九時までの夜間営業、一八日(火曜日)の定休日も営業、ただし二五日(火曜日)は休業としている。高島屋は定休日の一八日(火曜日)は営業し、二二日(土曜日)を臨時休業とした。丸物は一六日(日曜日)を九時までの夜間営業、さらに丸物はこの期間中ヒットラーユーゲント入洛記念として七階催場で「国民体位向上展覧会」を開催している。

えびす講をはさんでこの一週間から一〇日間は、京都の商店やデパートが「誓文払い」で一番の賑わいを見せる時期で、入山家では父直次郎とともに、音治郎の妻とめと静が参詣ついでにこの賑わいに触れたことだろう。次に、音治郎の家業以外のこの一年の出来事を、日誌から追ってみよう。

- ・ 二月 三日 (木) 釘拔地藏(石像寺…上京区千本通上立売上ル花華町)へ参詣。
- ・ 四月 一二日 (火) とめ、静、音治郎、健康診断のために中立売署へ行く。
- ・ 四月 一九日 (火) 午後八時より伏見稻荷神社へ参詣。
- ・ 四月 二九日 (金) 鯉のぼり用の竹を立てる。
- ・ 四月 三〇日 (土) 鯉のぼりをあげる。
- ・ 五月 一二日 (木) 商務学校授業料一円納入。
- ・ 五月 一五日 (日) 葵祭・今宮祭挙行。
- ・ 九月 三日 (土) 丸太町釜座より市電乗車、出町叡電から八瀬ケーブルにて四明嶽(京都市左京区修学院尺羅ヶ谷四明ヶ嶽)より横川元三大師堂(比叡山元三大師堂)参詣。
- ・ 九月 二五日 (日) 北野天満宮へ参詣。
- ・ 一〇月 七日 (金) 三井寺、日吉神社など参拝、市電蹴上にて好子と集合、浜大津まで徒歩、帰り三条大橋で解散。
- ・ 一〇月 一七日 (月) 久しぶりに堀川常盤館に行く。(祝日…神嘗祭)
- ・ 一〇月 二一日 (金) 堀川中央館(映画館)に行く。
- ・ 一〇月 二二日 (土) 時代祭。
- ・ 一二月 三日 (木) 夜、中央館(堀川中央館)へ行く。

音治郎も、父直次郎ほどではないが、神社仏閣への参拝がみられる。石像寺、伏見稲荷、横川元三大師堂、北野天満宮、三井寺、日吉神社などである。

石像寺は、通称釘拔地藏と称せられるように、諸病平癒を願った人びとが参詣する寺として知られている。四月十九日に参拝した伏見稲荷は、稲荷祭(神幸祭)に合わせた参詣であろう。五月一五日の葵祭<sup>12)</sup>、今宮祭が執り行われたこと、さらには一〇月二二日の時代祭が執り行われたことを日誌にとどめ、九月三日には、出町叡電から八瀬ケールに乗って、四明嶽より横川元三大師堂に参詣している。この参詣に関しては、次の『京都日出新聞』で「野に山に鍛へよ心身」という特集記事のなかに、「銃後」の体を鍛えるハイキングコースの一つとしてあげられているのである。

「挙国、ハイキング札讀 長期戦の勝利はこの一歩から 銃後の脚に動員令！

支那事変の著しき進展は、愈々一億同胞をして事変最後の目的貫徹への重大決意を促し、銃後国民の生活は長期聖戦に備へて体力の増進を最も緊要事とし、既に中央においては国民精神総動員下、不断の心身鍛錬を提唱、また京都市においてもさきに体育課を新設、これを母体として各学区に体育振興会を創設して、全市を挙げて老若男女の別なく体位の隆々たる向上へ意義深い諸行事が実施されつゝある折柄、時は新秋市近郊を中心とする明眉なる山川涼風湧く原野に加へて、森厳崇高なる神域、清雅なる史蹟をいたる所に織込む秋空の下を行く心身練磨のハイキングこそ、敬神崇祖の涵養、長期聖戦下における日本精神の振興の上にも、時局下多彩の脚光を浴びる国民運動の一翼であらう。」

と述べ、続けて健脚向けと一般向けを区別しながら以下のコースを掲載している。①比良山コース、②湖南アルプスコース、③奥比叡坂本コース、④愛宕嵐山コース、⑤滋賀山中越コース、⑥醍醐横断コース、⑦醍醐縦走コース、⑧京都西山めぐり、⑨男山縦走コース、⑩天王山柳谷コース、⑪摂津耶馬溪ボンボン山コース、⑫摂津耶馬溪阿武山コース、⑬香里盤船コースであり、またそれぞれにおけるいくつかコースが詳述されている。

音治郎がこの日に八瀬ケーブルを使い四明ヶ嶽から横川元三大師堂参詣したコースは、③のコースに含まれていた。実際坂本まで比叡山を横断するとなると徒歩時間七時間とあり、横川元三大師堂から同じコースを引き返したのではないかと思われるが、この参詣により彼に翌日午前の行商を止めるほどの疲れが出たことは確かである。

北野天満宮への参詣は、二五日の「北野さん」に合わせた参詣である。娘好子と同伴しての滋賀県の三井寺、日吉神社への参詣もみられる。

音治郎は日誌にとどめただけでも、一〇月一七日（祝日…神嘗祭）、一〇月二二日、十一月三日（祝日…明治節）の三日間、映画鑑賞に行っている。次項で述べるように堀川沿いの二軒の映画館（常盤館、堀川中央館）である。

ちなみに、音治郎が夜に映画鑑賞に行った十一月三日は「明治節」の祝日で、武漢三鎮占領の「高揚」のなかで、市内外における人出が新記録をつくったと、『京都日出新聞』は次のように伝えている。<sup>15)</sup>

「明治節人出の新記録　電車もバスも嬉しい悲鳴だ

菊薫る明治の佳節三日は、絶好の祝賀日和に恵まれて、銃後の感激一入深く、桃山御陵への参拝者はつひに新記録をつくったのをはじめ、武運長久祈願の神社巡拝、体位向上のハイキング部隊、家族づれの行楽群で京洛を人の波で埋め、この日を書入れにしてゐた市電市バス、各郊外電鉄、お馴染みの動物園、植物園、新京極の興行街など、

予想以上のお客様迎へて、久しぶりにホクホクものだった。その笑顔を打診してみると、

先づ市電は年越しの日の記録に近い卅五万人、市バスが四万八千人を運んだのははじめ、各郊外電鉄も、

△京都駅 では、上り下り線共に初発列車より素晴らしい動きを見せ、降車人員約三万八千、乗車人員約三万五千

△京阪電車 桃山御陵を沿線にひかへる京阪電車では、早朝来ドツと押しかけた団体個人の奉拝者の群で大混

雑、その他沿線ハイキングの人の波に、臨時急行の増発増発で夕方までに十二万人

△新京阪線では、長岡競馬とハイキング客で五万人

△京阪京津線が、びわ湖行及び連絡廻遊客でザット二万五千

△奈良電車 桃山御陵参拝と沿線スポーツで、京都駅で発売したもの、みで約五千八百、全線で三万余の上成績

△叡山電車が一万五千

△鞍馬電車が八千人で、ともに平常の五倍と云ふ上乘の成績にホクホクの体

新京極は早朝興行でこの日に備えたが、午後から夜にかけて一層人出が多く歩くに骨が折れる始末で、五条署御旅の派出所は、七人の迷児を取り扱った。従つて各興行場は何れも超満員の盛況、また坊ちゃん嬢ちゃんて埋まった動物園は平素の日曜日の五倍に近い八千七百人を入れ、植物園もお弁当を持った人達がどん／＼くり込んで、八千という新記録、円山公園は五万の嬉しい新記録の豪華版が繰り展げられた。」

## 6 子どもたちの日常と遊び

特にこの項では、入山音治郎家の子どもたちの日常と遊びについて述べたい。そのことについては、日誌が音治郎の手になる以上、父親の目を通して垣間見ることになるが、子どもたちの息づかいを感じ取ってみたい。



この年に音治郎の子どもたちそれぞれは、誕生日をむかえて好子二六歳、克太良一三歳、道夫一〇歳、エイ子が六歳となる。

好子は同志社高等女子部の生徒であつた。<sup>(16)</sup> 好子が同校に入学したのは、尋常小学校を卒業した昭和一〇（一九三五）年四月であり、その年の同校の定員は九五〇人、生徒数は九七七名であつた。学費の概算は九九円であつたといふ。<sup>(17)</sup> また、入山家の他の資料によると、好子は次のような道順で通学していた。「（自宅から）榎木町通東へ、府庁前北へ、下立売通り東へ、烏丸通りへ、御苑内ヲ通り、今出川御門ヲ過テ登校、<sup>(18)</sup> 帰路ハ此ノ往復トモ此の道順」。彼女が京都御苑の春夏秋冬、季節の移ろいのなかを登下校する様子が目にうかぶ。

克太良は同年三月に滋野尋常小学校を卒業し、京都市立松原商務学校を受験、合格し、四月から晴れて新一年生として通学することになる。三月二八日から同月三〇日までおこなわれた受験には、母親のとめが付き添っている。ちなみに、この年の公立中学校の①最終志願者数、②定員、③前年の志望者集の一覧が『京都日出新聞』<sup>(19)</sup>に掲載されているが、松原商務学校はそれぞれ①一〇〇八名、②六〇〇名、③九九六名、競争率一・六八倍であつた。同校は昭和九（一九三四）年に設立された学校で、所在地は現在の京都市立松原中学校のある京都市中京区壬生相生町である。おおよそ学校までは自宅から二kmほどあるが、通学方法は不明である。

道夫は滋野尋常小学校の四年生であり、エイ子は来年四月の同校への入学を待つ末っ子であつた。

当然エイ子以外はそれぞれ学校生活があり、それが彼らの生活の大きな部分を占めているが、家族として父音治郎は、仲睦まじく過ごす彼らの姿を日誌に書きとどめたのである。子どもに関する日誌の記事を追ってみよう。なお、子どもたちにとつての祖父直次郎との神社仏閣参詣については、直次郎関連の記事のなかで述べたのでここでは省略する。

- ・二月 三日(木) 克太良受験用参考書一 四五銭。
- ・二月 一日(金) 長浜の門川ミネ上京のついでに、好子とエイ子連れて堀川の活動写真を観にいく。
- ・三月 一日(金) 克太良、道夫、桃山へ遠足。
- ・三月 二二日(火) 克太良卒業式。
- ・三月 二八日(月) 克太良、松原商務受験、付添母午前七時半外出、午後三時半帰宅。
- ・三月 二九日(火) 克太良、受験二日目。
- ・三月 三〇日(水) 克太良、受験三日目。
- ・四月 一〇日(日) 子どもたち、夜に琴平様の夜店(樫木町通室町西南)に行く。
- ・四月 二七日(水) 克太良、好子遠足で各学校より比叡山へ行く。
- ・九月 一八日(日) 静、好子、堀川常盤館(映画館)へ行く。
- ・九月 二七日(火) 隣りせん、子どもを全員連れ伏見稻荷神社へ参詣。
- ・一〇月 七日(金) 音治郎、三井寺、日吉神社など参拝、市電蹴上にて好子と集合、浜大津まで徒歩、帰り三条大橋で解散。
- ・一〇月二二日(水) 午後に道夫が野球遊びのとき、友人のバットが顔面にあたり怪我、病院へ。
- ・一〇月二四日(月) 道夫顔面の傷全快。
- ・十一月 一日(火) 松商陸上運動会開催、静子、道夫行く。
- ・十一月 一日(火) 哑学校運動会、エイ子と隣りの淳司が見学(音治郎同伴)。
- ・十一月 二日(水) 夕食後、好子、克太良、静子、活動写真へ行く。

・一月 四日（金） 北野天神祭にエイ子、静行く。

三月一日に、克太良と道夫は桃山へ遠足に行っている。滋野尋常小学校からの遠足であろうが、克太良にとっては小学校時代最後の遠足になる。周知のように、桃山は明治天皇の陵が所在するところで、一般には桃山御陵と呼ばれる。

克太良の松原商務学校への受験・進学は、家族としても大きな出来事で、上述のように受験には母とめが同伴している。四月二七日には、好子は同志社高等女子部から、克太良は晴れて合格し通学することになった松原商務学校から比叡山へ遠足に行っている。

子どもたちにとって、映画Ⅱ活動写真は大きな楽しみのひとつであったろう。長浜の門川ミネが二月一日の紀元節の日に上京してきた折、好子とエイ子連れて堀川の活動写真に行っている。また、静と好子が九月一八日の日曜日に堀川常盤館へ、さらに一月二日（明治節の前日）の夕食後、好子、克太良、静の三人が活動写真へ出かけている。音治郎も一月三日（明治節）の日には、中央館（堀川中央館）に映画鑑賞に出かけている。前日に子どもたちが出ており、映画鑑賞が入山家の娯楽のひとつであったことは確かである。

ちなみに、映画館に関して、京都においては新京極界限に集中するとともに、西陣地域とその周辺においても多く所在していた。堀川通に面しては、堀川中央館と常盤館<sup>(20)</sup>があり、入山家は<sup>(21)</sup>この二館を利用していたことがわかる。両館とも入山家からは歩いて一〇分ほどのところにあった。

四月一〇日（日）に、子どもたちで夜に琴平様の夜店に出かけている。<sup>(22)</sup>子どもたちの歓声が聞こえるようである。

一〇月一二日の午後、野球遊びをしていた道夫の顔面にバットがあたり怪我をして、彼は病院へ運ばれている。その時の日誌に「午後、道夫野球あそび中に、友人の為顔面をバットにて打たれ傷を負ひ、直ちに松山外科医院にて手

当を受く。経過良し」と記している。一〇月二四日で傷は全快しているが、この間の家族の心配は察するに余りある。音治郎は治療にかかった費用も日誌に「此の間の治療費六円程」(一〇月二四日)と記した。

滋野尋常小学校の運動会については次節でもふれるが、子どもたちが通う学校の運動会は、家族にとっても娯楽の一つであつたろう。一月一日の松原商務学校の陸上運動会には克太良の叔母に当たる静と弟の道夫が行っている。ところで、同日に開催された啞学校(京都府立聾学校)の運動会にエイ子と隣り和一郎家の長男淳司が音治郎に連れられて見学にいっている。音治郎はそのことを日誌に「今日啞学校も運動会であつた。エイ子と隣り淳司と共に見た。そうして終会になるまで行つた」と記した。

そもそも、日本における盲聾教育のさきがけとして明治八(一八七五)年ごろに京都に開設された盲啞院は、民間立、府立、市立、府立と変遷した。仮盲啞院として明治一一(一八七八)に上京区東洞院通御池上ルに開設され、翌年に府立学校となり、釜座通榎木町下ルにあつた旧染色学校跡に移転した。明治二二(一八八九)年に京都市に移管され、その後大正二(一九一三)年には、同所に盲啞院聾啞部の新校舎が竣工している。大正一四(一九二五)年に同校が、京都市立盲学校と京都市立聾学校に分離された。昭和一二(一九三七)年一二月には上京区鷹野花ノ坊町に新校舎が竣工され、盲学校は移転し、聾啞学校が旧校地に単立することになる。<sup>(23)</sup>

盲啞院は設立当初から、障がい児の家族、近隣の篤志家、教師、地域に支えられ、地域に開かれた学校という性格を持ち、同校で開催された運動会の見学に多くの近隣住民が訪れたと考えられる。入山家から同校までは、榎木町通を東にすすんでいけば、歩いて五分ほどの距離であり、音治郎が六歳のエイ子と和一郎家の長男五歳の淳司の二人を連れて見学に行くことは、同校の運動会での地域の賑わいを見学するという気持からであつたと考えられる。

この年、京都市中の年中行事といわれるものは概ね執り行われてきた。節分(二月)、都をどり(四月)、鴨川踊り(五月)

葵祭（五月）、今宮祭（五月）、祇園祭（七月）、<sup>(24)</sup>大文字送り火点火（八月）、えびす講（二〇月）、時代祭（二〇月）、天神市（毎月二五日）、弘法市（毎月二日）などである。しかし、防空訓練のため大文字送り火は八月末の二八日に延期され、<sup>(25)</sup>都をどり、鴨川踊りの演目が大幅に変更されたりしたことを考えると（第四節参照）、京都市民の生活のリズムを作り出す市中の年中行事も、戦時下における戦争の日常化のなかで、徐々にその「高揚」のなかに吞み込まれ始めていったといつてよいだろう。それでも、それぞれの賑わいは相変わらずであつたという。京都市民の「したたかさ」である。

### 三 町・学区のなかでの家族

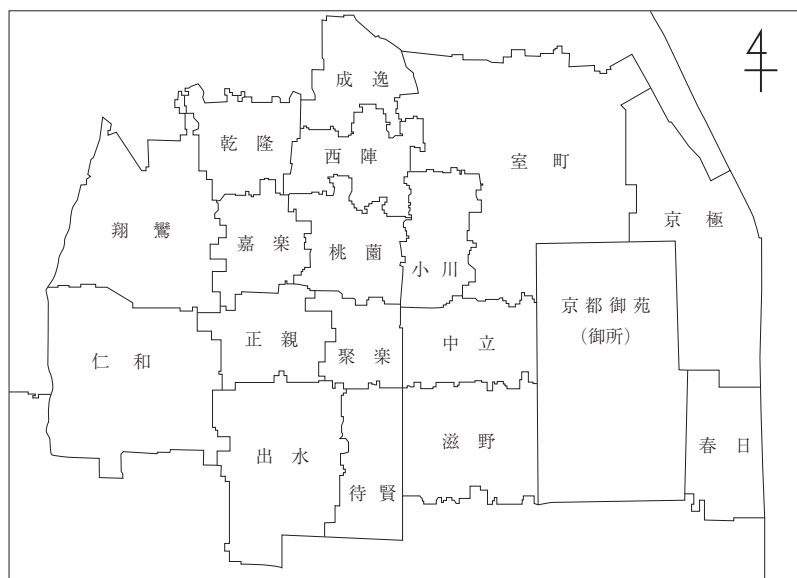
入山家が居住する東魚屋町は、小川通をまたいで、西は油小路通、東は西洞院通で、榎木町通をはさむ両側町である。大正元（一九二二）年一〇月時点で、宅地が三二筆で家持は三八名を数える。そのうち二筆（地番…三四七、三四八）が入山直次郎名義となつて<sup>(26)</sup>いる。

町名の由来は、古くから榎木町通東堀川から西洞院に至る間に魚市場が開かれたことによるとされている。近世には錦の店、魚棚通の六条ノ店とともに、三店魚問屋の一つとされた。近代に入り、上京一八番組、第二〇区、第一六学区と編成替えされてきたが、昭和四（一九二九）年に滋野学区の一町とされた。<sup>(27)</sup>克太良の妻武子によれば、東魚屋町は戦後まで魚の間屋、小売り、それに関連する仕出し屋などの生業を営む家が軒を連ねていたという。入山家はそういう町の一角で豆腐製造と行商を家業として<sup>(28)</sup>いるのである。

そもそも町というものは近世以来自治組織でありつつ、行政機構の最小単位として時代ごとに様々な役割を担っ

ており、その町に対して行政側は、「能ク上下ノ氣脈ヲ保持シテ行政事務ノ普及ヲ計リ、又自カラ共同自治ノ機関」とするために、明治三〇（一八九七）年一〇月の京都市会での審議可決を経て、「公同組合」という新たな名称を付与したのである。いわば、町という単位が公同組合という名称の行政単位に読み替えられていくのである。設立当初の公同組合数は、上京区で七九六、下京区で八三五であつた。<sup>29</sup>

滋野学区は上京区の南端に位置し、北は下長者町通、南は丸太町通、西は東堀川通、東は烏丸通によって囲まれた地域である。烏丸通をはさんで東は京都御苑であり、北は中立学区、南は中京区梅屋学区、中京区竹間学区の一部、西は待賢学区が隣接する。学区内には幕末に京都守護職邸が置かれ、その跡地に京都府庁が設置されている。また、近世には、学区内の室町通り以東は禁裏六丁組に属し、禁裏御所や公家社



第2図 上京区内学区図

注：『史料 京都の歴史 第7巻 上京区』（昭和55年 平凡社）添付図「上京の名所と史跡」参照。

会とも密接なつながりがあり、また、諸藩（毛利藩、鳥取藩、丸亀藩、彦根藩）の屋敷、さらには京都の豪商といわれた茶屋四郎次郎邸や古義堂（上京区堀川通下水ル）を開いた伊藤仁斎の居宅もあった。<sup>(30)</sup>

滋野学区内は、三丁目、西鷹司町、茶屋町、四丁目、元廿一鷹司町、元廿鷹司町、近衛町（油小路通）、近衛町（室町通）、両御霊町、五丁目、常泉院町、西裏辻町、勘解由小路町、八幡町、東裏辻町、紹巴町、中出水町、藪之内町、東立売町、勘兵衛町、五丁目町、春帯町、六丁目、門跡町、米屋町、武衛陣町、上鍛冶町、堀松町、大黒屋町、養安町、丁子風呂町、今葉屋町、東橋詰町、大門町、西大路町、春日町、西山崎町、御霊町、東魚屋町、西出水町、夷川町、桜鶴円町、計四二の町で構成されている。<sup>(31)</sup>

そもそも学区とは「明治二十五年七月以来、教育事務のほかにも多くの行政事務について、市民の地縁的組織の基礎単位として、大きな役割を果たし、たびたびの行政区の分合に際して、地域の取捨選択に発言権を有することが多かった」とされるものである。<sup>(32)</sup>

それでは、入山家が町や学区のなかでどのように生活を営んでいたかを、日誌の町・学区にかかわる記述からうかがってみよう。

・ 一月 二三日（日） 滋野婦人会演説、好子出席。

・ 四月 一〇日（日） 東魚屋町御千度 北野天満宮へ参詣、皇軍武運長久祈願を兼ねる。花時ゆえ、各町御千度で賑やか。

・ 四月 一三日（水） 護王神社の護王会費一円。

・ 四月 二六日（火） 午後八時より町内会議、町旗の件。

・ 五月 二日（月） 町内一同、下御霊神社にて中井千代、木村シゲ病氣平癒祈願。





・五月 八日(日) 降雨のため衛生掃除中止、一四日に延期。

・五月 一四日(土) 衛生掃除執行。

・八月 四日(木) 東魚屋町ラジオ体操会出場、エイ子、道夫、音治郎。

・九月 一六日(金) 町内公同組合長選出のため、夕方七時四〇分から役員会、山田安之助氏組長に決定。

・一〇月 七日(金) 滋野校小運動会開催。

・一〇月 二三日(木) 向かいの藤井様から松茸を貰う。

・一〇月 一五日(土) 町内石伝様の年忌にあたり、供養御茶の子あり。

・一〇月 一五日(土) 降雨のため滋野校運動会延期。

・一〇月 一六日(日) 滋野校大運動会開催。

・一〇月 一六日(日) 父、敬老会に出席。

・一〇月 一七日(月) 滋野学区にて学区青年団、軍人会体育向上大会開催。

・一二月 二日(水) 火の用心巡り。

・一二月 三日(木) 第一回町対抗相撲大会催行。

・一二月 四日(金) 滋野校講堂で朝日ニュース映画あり。

町に関する年中行事として、四月一〇日に催された御千度参りがある。東魚屋町としては、北野天満宮に参詣しており、ちょうど花見時でもあり、おそらく天満宮の西隣りの平野神社での花見であろう、そのほかの町からも御千度参りで賑わっている様子がうかがえる。公には「皇軍」の武運長久祈願の参詣であったが、花見時としての賑わいは音治郎にも感じ取れたであろう。しかし、この年には京都府令として「お花見取締り」が出て、円山公園、嵐山、御室、

平野神社、醍醐など洛中洛外の花の名所全部に及ぶとされており、それを「戦時下のお花見取締府令 屋外催しは成らぬ 近く臨時飲食店に厳しいお達し」として『京都日出新聞』<sup>33)</sup>は報じている。しかし、それでは民心を委縮させかねないと当局者自身も考え込んでいる様子で、「結局お花見関係者の良心次第で、適当に融通性が認められることになるようだ」<sup>34)</sup>とも報じている。

われわれは、ここでも戦時下における日常の戦争化、戦争の日常化、すなわち、戦争が生活のなかに浸透し、戦争を常に意識させられるとしても、「生きる」「楽しむ」「交流する」「支える」といった生活の質を維持しようとする生活者の姿、そして町の年中行事である春の御千度参りを執り行うに当たって、武運長久の祈願をしつつも、例年通りの花見をにぎやかに催すという町の意味を見て取ることができる。町民の行動に、行政も「適当に融通性」を認めざるを得なかったのである。

昭和一一（一九三八）年に音治郎が町のなかでどのような役回りであったかは定かではない。しかし、町の家持層として町行政にかかわってきたことは、たとえば、四月二六日の町旗についての町内会議、九月一六日に町内公同組合長選出のため開催された役員会に出席していることなどからも推測できる。ちなみに、この選挙では山田安之助が組長に選出されているが、同人は音治郎の妹タミの夫であった。

町内として、住民の病氣平癒祈願に氏神である下御霊神社に出向いたり、衛生掃除の執行、ラジオ体操への参加、火の用心の巡回、父の敬老会の参加、さらには町内での年忌に当たって「茶の子」のやり取り、物品の贈答など、町内での密接な関係を彷彿とさせる。しかし、町Ⅱ公同組合としての「つながり」は、それにとどまらず、次節で述べる戦時下ならでの役割を担わざるを得なかった。それが、防護組をはじめとした「銃後」の防空・防火の実働組織としての役割であった。

滋野学区としては、長女好子が滋野婦人会演説に出席している。また、学区の運動会への参加、学区青年団、軍人会体育向上大会が開催され、明治節の祝日一月三日に開催された第一回の町対抗相撲大会も、おそらくは学区単位で行われたものと思われる。さらに、一月には、滋野校の講堂で朝日ニュース映画の上映があり、家族として鑑賞したであろう。

#### 四 家族と戦争

本節では、日誌に記載された記事のなかで、戦争にかかわるものを集成した。前年の日中戦争開戦を受けて、「いけいけドンドン」の戦争の「高揚」のなかで、文字通り「銃後」の備えとして、家族の動き、町の動き、学区の動き、京都市中の動きを照らし出してみたい。

- ・ 一月 一三日（木） 和一郎から手紙が、山田安之助、隣りせんに来る、泰三も無事。
- ・ 一月 一九日（水） 上海派遣軍泰三へ手紙出す。
- ・ 一月 二一日（金） 泰三、和一郎より便り。
- ・ 一月 二一日（金） 税務署へ出征軍人家族として申告。
- ・ 一月 二二日（土） 泰三より手紙来る。
- ・ 一月 二七日（木） 和一郎より便りあり。
- ・ 一月 二八日（金） 渡辺享様応召のため、御霊神社にて武運長久祈願。
- ・ 一月 三一日（月） 滋野小学校、出征軍人家族慰問。

- ・二月 六日(日) 和一郎より葉書来る。
- ・二月 七日(月) 東魚屋町一同より町内出征軍人に慰問袋送られる。
- ・二月 八日(火) 東魚屋町公同組合長宅へ、慰問袋送付の件お札に行く。
- ・二月 八日(火) とめ(音治郎妻)、護王神社護王婦人会に入会。
- ・二月 八日(火) 栗辻三エ門氏方店員入営満州のため、父送る。
- ・二月 一三日(月) 谷岡より伝言に、泰三も元気に活躍との報あり。
- ・二月 一三日(月) 和一郎へ通信する。
- ・二月 一四日(月) 和一郎から便りあり。
- ・二月 二四日(木) 和一郎から隣り子どもたちへ手紙来る。
- ・三月 一日(火) 泰三より葉書来る、無事。
- ・三月 一日(火) 軍友会服初めて着る。
- ・三月 一日(火) 前川氏方柳正雄君入営出発、旅順。
- ・三月 二日(水) 滋野学区最初の帰還兵坂本君。
- ・三月 六日(日) 父、せん母親、新京極花月にて出征軍家族慰労会へ行く。
- ・三月 六日(日) 隣り喜美子へ泰三から手紙、写真が来る。
- ・三月 八日(火) 竹下一二三氏凱旋。
- ・三月 一〇日(木) 和一郎より葉書来る。
- ・三月 一四日(月) 北支派遣軍谷口隊より隊長殿手紙来る。

- ・三月 一五日(火) 和一郎より写真来る。
- ・三月 一七日(木) 泰三より写真と手紙来る。
- ・三月 二四日(木) 和一郎から葉書来る。
- ・三月 二六日(土) 西村和三郎氏方森田哲三君、召集令来る。
- ・三月 二六日(土) 和一郎より慰問品の札状、東魚屋町一同様へ来る。
- ・三月 二七日(日) 和一郎よりせんへ写真と手紙来る。
- ・四月 二日(土) 出征軍人家族慰問日、都をどり見物、静子。
- ・四月 一二日(火) 隣り清吉、徴兵検査のため野洲へ帰る。
- ・四月 一六日(土) 泰三から手紙来る。
- ・四月 一七日(日) 油小路通丸太町上ル小西方店員応召、歩兵福知山へ午前九時出発。
- ・四月 一八日(月) 町内杉本健蔵君慰問札状来る。
- ・四月 二二日(金) 防空演習。
- ・四月 二六日(火) 靖国神社臨時大祭、殉忠の英魂に銃後の感激あらた。
- ・四月 二六日(火) 泰三より元気で奉公しているという便りがあつた。
- ・四月 三〇日(土) 泰三、和一郎より便りあつた。
- ・五月 六日(金) 泰三より葉書来る。
- ・五月 九日(月) 米屋町(上京区油小路通丸太町上ル)小原氏方坂本清太郎君出征する。
- ・五月 一二日(木) 滋野校区で一五名、特務兵召集令下る。

- ・五月 一三日(水) 山和清吉、徴兵検査のため帰郷。
- ・五月 一五日(日) 滋野学区三二名に召集令下る。
- ・五月 一九日(木) 町内組合長宅集合、下御霊神社にて入魂式、出征兵士の武運長久祈願祭行う。
- ・七月 一日(金) 本年度第二次防空訓練、午後六時より参加。
- ・七月 七日(木) 東魚屋町で下御霊神社参拝御百度、皇軍将兵武運長久祈願、戦没将兵英霊へ目礼、のち町内出征兵士宅慰問、慰問品砂糖一箱。
- ・七月 七日(木) 滋野学区各団体より慰問。
- ・七月 七日(木) 泰三より無事の便りありたり。
- ・七月 一〇日(日) 和一郎、泰三へ慰問品送る。
- ・八月 三日(水) 戦地へ小包送る、泰三、和一郎。
- ・八月 五日(金) 松商教員出征に付き、克太良船岡山に集合、歩行二条迄歓送する。
- ・八月 九日(火) 東裏辻町(上京区西洞院通樫木町上ル)の田井俊雄君出発、福知山へ入隊。
- ・八月 一一日(木) 泰三から手紙来る、両名とも無事。
- ・九月 一日(木) 米屋町四〇名程、宇治青谷傷病者病院へ勤労奉仕。
- ・九月 一日(木) 東魚屋町長屋次男君、応召により岐阜行き。
- ・九月 三日(土) 四明嶽駅(八瀬ケーブル)より北支へ両名(和二郎、泰三)に葉書出す。ただし印紙貼付忘れ。
- ・九月 四日(日) 隣りせん宛に北支戦地より書留で三〇円送金があった。
- ・九月 七日(水) 梨木神社宮司より出征軍人武運長久祈願祭参列の招待状が葉書で来た。

・九月 八日(木) 小島市太郎氏店員井上喜代造君、応召にて餞別三円(入山直次郎、入山せん名)。  
・九月 一六日(金) 滋野校出征軍人家族慰問。

・九月 一七日(土) 和一郎より九月一日付け葉書到来。文面によると美味のり、味の素など送れとのことであるが、慰問品を送るにも戦地へ各個人あてのものは、一時中止になっており、仕方なく見合わせている。

・九月 二〇日(火) 戦地へ送る防寒毛布代、国防婦人会へ金一円献金。

・九月 二三日(金) 防空訓練打合せ。

・九月 二六日(月) 同町向かい二和佐(仕出し屋)の店員矢野与吉召集令来る。同君へ餞別。

・九月 二六日(月) 第三回防空訓練に入る。

・九月 二八日(水) 東魚屋町防火演習。

・九月 二八日(水) 二和佐店員矢野与市君、出発。

・九月 二九日(木) 中塚君再度の応召出発、多数歓送に元氣よく出発。

・一〇月 一日(土) 防空訓練で空襲に付き、行商一時間あまり中止で困った。

・一〇月 一日(土) 午後六時三〇分、空襲警報発令。

・一〇月 一日(土) 父直次郎電燈のもと新聞夕刊を奥の間で読むも、明かりが外部にもれ、巡回の防護団員より注意を受け、びっくりして消燈。

・一〇月 三日(月) 第一次防空訓練、午後六時から一二時まで勤務、異常なし。

・一〇月 四日(火) 第二次防空訓練、午後六時から一二時まで勤務、異常なし。

- ・ 一〇月 四日（火） 午後七時一六分空襲警報あり、七時四五分解除。月明かりの明るさに感動。
- ・ 一〇月 五日（水） 払下げ米学校より運ぶ、五呎と三呎、隣りは三呎。
- ・ 一〇月 七日（金） 下長者町通小川東の小西君除隊帰宅。
- ・ 一〇月 八日（土） 滋野学区内出征軍人遺家族懇談会あり。
- ・ 一〇月 八日（土） 護王神社にて戦捷祈願祭（余興、落語、講談あり）、父出席。
- ・ 一〇月 一五日（土） 松尾神社にて中央市場主催の出征軍人武運長久祈願がおこなわれる。
- ・ 一〇月 一八日（火） 山岡彦造方店員繁吉、勇躍出発。
- ・ 一〇月 一八日（火） 東山真如堂（京都市左京区浄土寺真如町）にて出征軍人皇軍将兵家族武運長久の祈願あり、父親参列。

- ・ 一〇月 二二日（土） 広東陥落する。
- ・ 一〇月 二七日（木） 武漢三鎮完全攻略。
- ・ 一〇月 二八日（金） 下御霊神社参拝、一時より護王神社、夕方から提灯行列。
- ・ 一〇月 二九日（土） 隣り清吉、一二月八日より出発の予定。
- ・ 一二月 一日（木） 南井一雄、軍人として出発。
- ・ 一二月 四日（日） 泰三より葉書来る。

先ずは、出征している和一郎と泰三との書簡などのやり取りである。一月五回、二月四回、三月八回、四月三回、五月一回、七月二回、八月二回、九月三回、十二月一回、合計二九回である。日誌は記述が一二四日ほぼ四か月分なので、この間に何度かやり取りをされていることは考えられるが、それを除いて、これがこの年の二人とのやり取り



りとしたら、二週間足らずに一度ほどの頻度で戦地の和三郎、泰三とやり取りがされていることになる。そのやり取りを日誌は、「泰三、和三郎から便りがあった」（二月二日）、「和一郎より葉書来る」（二月六日）、「和一郎へ通信す」（二月十三日）、「隣り子供へ和三郎より葉書来る」（二月二十四日）、「和一郎、泰三に慰問品送る」（七月一日）など書きとどめていることが多いが、その書簡で彼らの生存を確認する音治郎は、素直に安堵している心情を簡潔な言葉で記している。「山田安之助氏及比仙<sup>（せん）</sup>人へ和一郎より手紙来る、泰三も無事」（二月十三日）、「泰三より葉書来る、無事」（三月一日）、「泰三より手紙来る、両名とも無事」（八月一日）。戦捷に沸き立つ「銃後」にあつて、出征兵士の武運長久を祈願し、「殉忠の英魂」に感激をあらたにしながらも、弟たちの無事を祈る率直な気持ちの現われである。

東魚屋町内、近隣町内、学区内などから、出征兵士たちが出る場合も書き留めている。隣り清吉も、滋賀県野洲での徴兵検査のために二度ほど帰省し、一二月には出征することが決まった（四月二二日、五月一三日、一〇月二九日）。清吉とは、和一郎家に雇人として働いていた人物で、和一郎妻さんの縁のものか、出身地が滋賀県の野洲であった。この年の滋賀県での徴兵検査は、四月一六日以降順次各所で施行されていた。<sup>（35）</sup>ちなみに、上京区では上京区役所で七月一四日から二九日までが予定されている。<sup>（36）</sup>入山家の向かいには仕出し屋の「二和佐」があるが、その店員の出征（九月二八日）、また克太良の通う松原商務学校の教員出征（八月五日）など、普段顔見知りの青年たちが出征していく姿を、音治郎はどのような心情で見送ったのであろうか。

一月二二日には、税務署へ出征軍人家族の申告に行き、父直次郎とさんの母親は、新京極の花月劇場で開催された出征家族慰労会（三月六日）、また直次郎が護王神社での戦捷祈願祭（余興として漫才、落語、講談など）（一〇月八日）、さらに直次郎は、真如堂で開催された出征軍人将兵家族による武運長久祈願の催しに参加（一〇月一八日）している。この時期、京都における他の神社仏閣でも武運長久祈願祭が催されており、梨木神社からは祈願祭への招待状が届い

ており（九月七日）、音治郎は松尾大社での中央市場主催の祈願祭（一〇月一日）に参加している。

武漢三鎮の完全攻略の報を受けて、翌日には音治郎は下御霊神社、護王神社へと続けて参拝し、夕方からの提燈行列にも参加しているのである（一〇月二八日）。

四月二日に出征軍人家族慰問として催された都をどりに、静が見物に出かけている。

ところで、本年開催の都をどりに関して、『京都日出新聞』<sup>(37)</sup>は、次のように伝えている。

「讀へよ都をどり」

艷麗優雅な京舞に事変色ゆたかに織り込んだ今年の都踊は、一日午後五時華やかに初日の幕を開けた。

これに先立つて祇甲（祇園甲部―注西村）国防婦人会では、今次事変に出征、傷病の身となった勇士達や、また遺家族達を招いて都踊を見せ、懇ろに慰めたいとあって、一日から十四日までこれらの招待に充て、毎日午後三時から特に一回開演して見せることとなり、第一日は家族達を招いたが、一同大喜こび。

かくて午後五時第一回目を開演したが、従来の井上流の型を破った新しい試みや、山田抄太郎氏をはじめ各師匠連苦心の振付、作曲に観客ごとく感嘆の声を放ち、問題の入場税も祇甲側の負担となってお客はすこぶる朗らか。

各回各等とも大入満員の盛況であった。なほ出征軍人遺家族ならびに傷病勇士招待は、前記の如く十四日間であるが、うち傷病兵招待は五、七両日で、ラヂオによる全国中継放送は五日午後八時からと決定した。」

そのプログラムについては、同新聞<sup>(38)</sup>に次のように報じられた。

「事变下に開く 都をどり 鴨川踊もプラン決る

事变下に漸く開演を許可された祇園甲部の都踊と先斗町の鴨川踊は、ともに軍国日本の踊にふさはしいものに基づく、同廓の首脳者は寄々協議を重ねてゐたが、祇甲の方はプランが出来たので十七日京都府保安課へ届出た。それによると、

第一景 開題（背景は例年通り銀地の襖）

▲第二景 上賀茂神社神苑の朝（同社別雷神神社第二鳥居内の朝の景色）

▲第三景 稻荷山麓の梅（稻荷山の荷田春満の旧址に梅の薫る背景）

▲第四景 大覚寺の新緑（右京区嵯峨大覚寺門跡の御殿内前庭の夏景色の背景、こゝで北嵯峨踊を演奏）

▲第五景 南京城の旭光（首都南京城内に皇軍進撃して大激戦を演ずる場面と皇軍入場の二景）

▲第六景 高雄山の紅葉（高雄山神護寺境内の護王神社旧趾の楓の背景、こゝで和氣清麻呂公を讃ふ）

▲第七景 円山辺の雪（円山から下河原付近の旗亭を背景に、維新の志士達の会合当時を偲ぶ）

▲第八景 平安神宮の桜（神域の桜の背景、防共協定祝賀を題材として、壇上で祝賀の万歳を奏樂し、さらに邦

樂で愛国行進曲を演奏する）

（以下略）

明治五（一九七二）年に京都博覧会の余興として企画開演されてから、それ以降、京都の華やいだ花街文化の一つとして開催されてきた「都をどり」が、戦争という渦のなかに巻き込まれていく。しかし、それを絶やさせないでこうとする人たちは、「軍国日本の踊にふさわしい」ものとするため、その演目に「南京城内への皇軍の進撃」、また

第八景では昭和一一（一九三六）年に締結された日独防共協定祝賀の万歳と邦楽による「愛国行進曲」が演奏されたのである。「都をどり」の華やかさに戦時下における「軍国日本」「武運長久祈願」の色彩を織り交ぜることにより、京都府保安課の許可を得て開催にこぎつけたのである。ある意味、戦争の「高揚」のなかでの「媚び」であったとしても、「都をどり」を守り続けるという「したたかさ」のあらわれであったと言えるかも知れない。しかし、太平洋戦争に突入した後、昭和一九（一九四四）年から戦後昭和二四（一九四九）年までの六年間は中止に追い込まれたのである。ちなみに、都をどりの開演に続いて五月一日からは先斗町歌舞練場で鴨川踊が開演された。その内容についても、「日本の誇り」と題して「軍国日本」に相応しい戦時色を盛り込んだ演目となっていた。<sup>39</sup>出征兵士の家族としてこの年の都をどりを鑑賞した静はどんな思いであつたらうか。

町内、学区での「銃後」の動きはどうであつたらうか。

東魚屋町一同から町内出征軍人へ慰問袋が送られている。そもそも慰問袋とは、各学区や各町さまざまな団体が戦地の出征兵士に向けて日用品などの物品を入れて送るための袋であつた。『京都日出新聞』には、慰問袋に関して次のような記事を掲載している。<sup>40</sup>

「慰問袋の山　トラックに一杯　西本願寺婦人会東山学園仏教青年会などが、去る十五日から作成を急いでゐた慰問袋七千個は、廿二日早朝から荷造りを行ひ、正午すぎ執行所前でトラックに積み込んで威勢よく送り出した。室町学区でも　上京区室町学区銃後諸団体の熱誠こもる慰問袋四千百七十二個は、廿二日百二梱に包装されトラックに満載、本社を訪問して後直ちに梅小路駅から現地向け発送した。

柳池学区の銃後会　柳池学区銃後会では、過日來前線将士の慰問袋を調整中であつたが、廿二日その八百個を二

台のトラックに積み上げ、同会長舟橋清左衛門氏ら付添い、本社訪問の上梅小路駅から前線へ送った。」

西本願寺婦人会や東山学園仏教青年会、さらには町内、学区単位で包装された慰問袋が、新聞社経由で戦地へ送られていく様子がうかがえる。この時期何を入れるかについては、家族や地域によりそれぞれ異なる場合もあるだろうが、和一郎からの要望として、美味のりと味の素が挙げられている（九月一七日）。『京都日出新聞』には、慰問袋用の商品広告として「味の素」、「仁丹」などが掲載されている。例えば、昭和十三年一月一五日付朝刊に味の素本舗が、また昭和十三年三月一〇日付朝刊に森下仁丹株式会社が次のような広告を掲載していた。

（味の素）「勝って兜の緒を締めよ　味の素　皇軍大勝に加えて弥々銃後家庭の充実を要する秋です！健康保持と調味費節約とは味の素にお任せください。慰問袋に　陣中で味の素が喜ばれる事は非常なものです！ぜひ慰問袋には味の素を入れて我が皇軍将士をお慰め下さい！」

（森下仁丹）「謹んで英霊を追悼し、戦線の勇士に感謝を捧げませう　銃後の心づくし　慰問袋に仁丹　慰問袋や慰問袋に入れられた仁丹は、勇士たちの嬉こびを二重三重にします　銃後は、もとより不自由勝ちの戦線で仁丹は特に必要な　仁丹は勇士の疲れを恢復し、水中毒を防ぎ、消化を旺盛にして、胃腸を丈夫にし、頭痛・眩暈を醫し、士気を鼓舞す。」

ところで、戦地向けの慰問袋について次第に減少しているということ、塩野法相が閣議で「内地から発送する

戦地向の軍事郵便及び慰問袋の送料は全部無料取扱ひとしてはどうかと嬉しい提議をなし、所管の永井通相も慎重考慮を約し、直ちに事務当局に調査を命ずることとなった。(中略) 若し無料とすれば銃後の国民も大助かり、慰問袋殺到疑いなしといふ所だが、通信当局では趣旨には賛成だが、既に戦地から故国への軍事郵便を無料で取扱ひ、このため増員その他で経費が非常に嵩んでゐるので、全部無料とすることは至難だとの見解を取つてをり、一寸二の足を踏んでゐる」とのことであつた。おそらく、音治郎が九月一七日の日誌に、「仕方なく見合わせてゐる」と記述しているのは、こういった事情からではないかと思われる。

町内一同からの慰問袋送付に関して、和一郎から慰問品の札状が町内一同へ届いてゐるとともに(三月二六日)、他の町内出征軍人からも音治郎のもとに札状が届いてゐる(四月一八日)。

五月一九日と七月七日に東魚屋町で町旗入魂式、武運長久祈願祭が催されている。五月一九日の入魂式の詳細に関しては、昭和一一(一九三六)年の「当用日記」に覚書として当日の様子が記述されている。

「五月拾九日、夜半の雨東方の明るくなると、もに次第に止む、祭りの後宴の事なれば仕事も少なく早く済み、午后一時より公同組長殿宅前に集合、町内人員三十六名徒歩にて一同東魚屋町東へ、府庁前南へ、丸太町通を東へ、寺町南へ、下御霊神社へ、折り柄春日学区々内応召軍人歓送の軍友会、国防婦人会の一団神前祈願あり、其の次に東魚屋町々旗入魂祭、応召軍人三田村弥一郎君及ヒ征途の軍人及ヒ遺家族武運長久の祈願あり、終りて御神供御神酒を戴き、是れより丸太町通り西、堺町御門をへて健札門前にて最敬礼を行ひ、西に向ひ烏丸を南、護王神社へ参拝、又もや待賢学区応召者歓送者ありたり、烏丸通を南、下立売西へ、西洞院通を榎木町西へ、組合長殿宅へ、一同東魚屋町万歳三唱して解散す(茶菓 紅白饅頭 餞幸製一包)、時きに午後三時半久方ふりに西空に太陽の光をあを

ぐ、入魂式終り、曇り、午後晴れ、気温七十五度。」

五月一日、東魚屋町として町旗の入魂式のため、午後一時に町内人員三六名が共同組合長宅前で集合し、徒歩で下御霊神社にむかう。東魚屋町のある榎木町通を東に進み、府庁前まで出てそれを南に下がる。丸太町通まで出たのち、同通を東に進む。京都御苑を左手に見ながら寺町通まで進み、それを右折、南に下がり下御霊神社に到着した。そこでは「春日学区々内応召軍人歓送の軍友会、国防婦人会の一団神前祈願」に出会っている。同所での入魂式および応召軍人三田村弥一郎君と遺家族武運長久の祈願をおこない、そのあと一行は寺町通を上り、丸太町通を西に進み、堺町御門から御苑に入り、禁裏御所の建礼門前で最敬礼のあと護王神社の参拝に向かっている。同社では「待賢学区応召者歓送者」にも出会い、参拝のあと、烏丸通を下がり、下立売通を西に進み、西洞院通を榎木町通まで下がり、同通を西に行き、共同組合長宅前で万歳三唱をして解散している。

ところで、護王神社が軍神を祀っているわけでもないのに、なぜ多くの参拝者が訪れるのかに関して、『京都日出新聞』<sup>(42)</sup>は次のように伝えている。

「武運長久の神 奇蹟・不死身の氏子 日清日露両戦役この方 戦死一人もなし 護王神社の靈驗顯か。

聖戦下銃後の国民は全国津々浦々の神々に皇軍戦捷と武運長久を祈願し、街に村に美しい感激が繰り展げられてゐるが、京の別格官幣社護王神社は、祭神和氣清麻呂公で、軍神といふわけではないのに、不思議と地元の氏子中に戦死者が一人もないといふので尊信を蒐め、京都ばかりでなく遠い地方からも武運長久の祈願を依頼して来るものがあるといふ時局に相応しい話題。

滋野学区千七百戸は、護王神社地元の氏子で、護王神社が右京区梅ヶ畑高尾山神護寺の境内から、明治十九年現在、の鳥丸下長者町桜田町（桜鶴田町―注 西村）に遷座されて以来、氏神様として尊崇の的となつてゐるわけだが、日清、日露戦争を始めその後の戦役、事変に戦傷者はあつても戦死者は一名もなく、今度の支那事変にも氏子中から〇〇〇名が出征してゐるが、今日までに名譽の戦死者が一人もない不思議さ、勿論御国に捧げた生命であるから生命を惜む者は一人もゐないが、日清役以来四十余年間戦死者がないといふのは、和氣清磨公の加護に依るものだしといふので、応召者は全部同神社で武運長久祈願式を挙行し、滋野校一千の学童は、参拝カードを作つて毎日登校前や放課後に参拝するなど氏子中の感激は一人、この噂をきいて滋野学区のみでなく、全市から武運長久の祈願を籠めに参拝する人が殖え、殊に他府県から出征者のため祈祷を依頼してくる者がある等、護王神社は事変以来武運長久の神として石清水八幡宮に劣らず参拝者で賑わつてゐる。」

出征者の武運長久と「皇軍」の戦捷を願う一方で、出征している者たちの「名譽の戦死」ではなく、その者たちの「無事」と「死なせたくなさう」という家族たちや地域の思いが護王神社への参拝を促し賑わつてゐるとすれば、その二つの思いの間で揺れる「銃後」の者たちの心情をあらわしているのではないだろうか。

学区としては、滋野尋常小学校で出征兵士軍人家族の慰問（二月三十一日、九月一六日）や家族の懇談会（一〇月八日）などが行われている。

以上のように、家族、町、学区、地域といったつながりのなかで、特に戦時を想起させるものをあげてきたが、最後に、防空訓練下における様々な状況を見ることで、戦時下の家族と地域の実像を浮き彫りにしたい。

まず、日誌中に出てくる防空訓練の記事を上記記事の中から集成しておこう。



・四月 二三日(金) 防空演習。

・七月 一日(金) 本年度第二次防空訓練、午後六時より参加。

・九月 二三日(金) 防空訓練打合せ。

・九月 二六日(月) 第三回防空訓練。

・九月 二八日(水) 東魚屋町防火訓練に入る。

・一〇月 一日(土) 防空訓練で空襲に付き、行商一時間あまり中止で困った。

・一〇月 一日(土) 午後六時三〇分、空襲警報発令。

・一〇月 一日(土) 父直次郎電燈のもと新聞夕刊を奥の間で読むも、明かりが外部にもれ、巡回の防護団員より注意を受け、びっくりして消燈。

・一〇月 三日(月) 第一次防空訓練、午後六時から一二時まで勤務、異常なし。

・一〇月 四日(火) 第二次防空訓練、午後六時から一二時まで勤務、異常なし。

・一〇月 四日(火) 午後七時一六分空襲警報あり、七時四五分解除。月明かりの明るさに感動。

京都市の防空体制としては、前年の昭和二年(一九三七)年一〇月に防空法が施行され、それを受けて市役所に防護課が設置されるとともに、市民組織としてそれまで京都市連合防護団、区防護団、学区防護分団、班、係、組という系統組織が設けられたが、あらためて昭和一三(一九三八)年四月一五日に学区内の各町に防護組の設置が行われた。<sup>(43)</sup>「町防護組設定準則」を掲載した『京都日出新聞』<sup>(44)</sup>を引用しておこう。

「各町毎に、防護組、互いに連絡とつて築く鉄壁 全国に魁け京都市に

空襲だ、災禍だ、ソレ用意はよいか、千古平安の不滅の伝統と巨大なる資材と百万の生命を完き防護に置く固き備へは、より強くより深く！——京都市の防護組織は各区毎に区防護団あり、これを統轄する市聯合防護団があるが、更にこれを普遍強化するため新たに市内三千余町を総動員して、各町に『防護組』を設定し、有事に処して俊敏的確な自治的防護の実を挙げることに、なり、府警察部と連絡の上、十五日その設定準則を告示し、同時に市村市長の諭告が発せられたが、百万市民各戸各人残らず防護団員としての活動に躍起し、各町の実情に即応して区又は学区として行う実質的活動を基根にこれを編成し、互いに連絡一体全市縦横の防護鉄壁陣を布くわけで、各家庭にしんぞこ根を下したか、る防護組織の成果は、全国的にも頗る注目されてゐる。」

文字通り、京都市内における行政的系統の末端として町をその防護体制のなかに組み込むという意図で、各町、各戸、各個人まで掌握し、市内における防護体制を網の目のように縦横に組織しようとしたのである。

同記事によれば、「町防護組制定準則」は、附則を含め一二条からなり、町防護組を公同組合(町)区域ごとに設置し、所属の学区防護分団、区防護団、市聯合防護団の統轄に入ること、町防護組が隣保共助の精神に則り、空襲、災害時に一致協力して灯火管制、防火、避難に努めること、防護組として防護長、防護副長を置くことが規定されている。附則においては、公同組合(町)に所属している各家庭が実行する事項として以下のものがあげられている。

- ・ 灯火管制(灯火の隠べい遮蔽は一時的なものにせず恒久な施設とすること、灯火管制を実施しているときは、漏光の有無を外部から各々検分することなど)。

- ・ 防火(常に家庭内の火気に注意すること、防火用水用の桶・バケツを用意し水を満たしておくこと、防火水道用ホースを階上まで伸びるようにすること、防火砂の用意、不在および老人幼児のみ在宅の時は隣家に声掛けをすること、近隣で火災発生し

た場合速やかに組内に通報することなど)。

・防毒(各家庭で必要数の防毒面を準備しておくこと、簡易防毒室が可能なら設置すること、消毒剤などの家庭用救急用品を準備しておくことなど)。

・避難および救護(老人、幼児、病人がいるときは、近隣協力して安全地帯に避難すること、傷病その他緊急救護が必要な場合協力すること、避難所、救護所の所在、順路はあらかじめ周知しておくことなど)。

四月二二日の防空訓練は、中部防衛司令部管下二府一八県の本年度第一回目のものであった。<sup>(45)</sup>

七月に入り、第二次防空訓練が実施された。一日からは準備訓練として、本格的訓練は一二日午前〇時から開始されたのである。その内容は、燈火管制を主眼として、家庭防火、警報伝達、監視通信などが主なもの、各合同組合(町)を単位として設置されている町防護組がどのようにに対応するかを検証する訓練ともなった。<sup>(46)</sup>

七月一二日の訓練の様子を、『京都日出新聞』<sup>(47)</sup>は次のように伝えている。

「町防護組の活躍 猛訓練ではり切り

虎視眈々たる敵機は、十三日未明から我が虚を衝かんと懸命、午前六時第一回空襲警報が発せられて再び緊迫の色がみなぎる。

夜来の豪雨もスッカリ霽れ、敵襲にはモッテ来いの日和だ、油断の無い各防護陣では、次の防護組が活躍した。

午前九時、中京区油屋町が防毒演習を行ったのを始めとして福永町(防火、防毒)、上本能寺前町(防火)、妙満寺前町(防火)、橘町(配給)、左京区では東飛鳥井町百万遍北通(防火)、上京区一条松屋町(防火)、黒門上長者町(防火)、鞍馬口智恵光院付近(防火)が何れも午前中に、午後上京区元誓願寺浄福寺西入(防火)、鞍馬口浄福

寺付近（防火）、中京区虎石町（避難）、枅八幡町（防火）、東八幡町（防毒）、清明町（防火）、等持寺町（防火）、下白山町（防火）、烏丸榎木町養安町防護組（避難）、伏見区は銀座二丁目（防毒）、伏見第一小学校（防火、防毒）等々それぞれ猛訓練を行ひ、スハ敵襲の実戦即応に備えた。

午後三時以後には、上京区では蘆山寺千本西入（防火）、今出川千本東入（防火）、堀川今出川上る北船橋町防護組（防火）、中京区では上白山町（防毒避難）、守山町（防火）、中白山町（避難）、大文字町（避難）、山本町（防火）、赤柳之町葵館付近（防火）等々、殆んど全市に亘って猛訓練を行ひ、夕景に入り更に夜にかけて各防護組の猛訓練を行った」。

京都市内三〇〇〇を超える町の全体像が見えてこないが、同紙一四日朝刊に掲載された写真では、滋野学区内の町として榎木町通烏丸西入の養安町での訓練の様子がわかり、文字通り公同組合（町）を挙げての訓練であったことが伝わってくる。

ただし、燈火管制に関して府防空課が次のようなコメントをして、注意を喚起している。<sup>(48)</sup>

「第一日の燈火管制は比較的よく出来たが、これに満足せず更らに完璧を期するよう工夫をされたい。殊に京都市の中心街はよいが、その周囲部と郡部が思はしくなかったのは遺憾であった。九州に国籍不明の飛行機が来たのも、予想せぬ方面へ来たので面食った訳だが、田舎だから空襲なんかないと考へて燈火管制を忽せにするのは非常な誤りである、部分的にいふと不完全な所があるので、充分指導する（後略、傍線西村）。」

このコメントは、戦地における「連戦連勝」の戦況が伝えられるなかで、京都市の中心街以外で徹底しない燈火管

制に対しての防空課の「いらだち」の表明であったが、一方で、空襲の対象になりうる状況がまだ想像できないでいる市民の実情を、はしくも示したことになった。

音治郎が、一〇月初めの第三次防空訓練中に、燈火の光を漏らして町の防空担当者から注意を受けたのも、そのことの表れかもしれない。

第三次の防空訓練は、準備訓練が九月二六日から三〇日まで、本訓練が一〇月一日から五日までの日程で実施されたが、日誌中にはその打ち合わせ、準備訓練、本訓練の時まで、頻繁に記述が出てくる。おそらく今回の訓練においては、音治郎は、東魚屋町の防護組として役割を担ったのであろう。一〇月の三、四日と午後六時から一二時まで夜警勤務をしている。第三次訓練がどのような内容であったか、まず訓練の要項を記した『京都日出新聞』の記事をみてみよう。<sup>(49)</sup>

「仮装敵機の爆弾投下 実戦宛ら布く防空陣 初の試み審判部設置

第三次防空訓練 府から要項発表

中部防空司令部管下二府十八県の本年度第三次総合防空訓練は、軍防空訓練に即応して九月廿六日から卅日までを準備訓練、十月一日から五日までを本訓練の期間として実施されるが、府警察部では九日次の如く訓練要項を発表した。

今回の訓練はこれまで地方的部分的に行はれた訓練の総仕上げともいふべき本格的な訓練で、準備訓練期間中は警戒管制を行ひ音響管制が布かれ、本訓練に入るとともに、多数の仮設敵飛行機、味方防空飛行隊が活躍し、敵飛行部隊の空襲時には機上から擬装の爆弾、焼夷弾、毒瓦斯弾、瓦斯雨下などを投下、その状況に応じて地上の防空

陣地、初出勤の警防団、町防護組が実戦即応の防衛を行うこととなつてゐるが、今度の訓練には初めての試みとして府統監部に審判部が設置され、また地上、水上の交通一部制限が行はれ、前後十日間貴重な試練が重ねられることになつてゐる。

△訓練の目的 陸海軍にて行ふ軍防空訓練に即応して、真に実戦に即応する目的を以て、京都府防空計画に基き訓練をなし、以て刻下の国土防空に遺憾なからしむるを目的とす。

△訓練の区域 府下一円（沿岸水域を含む）。

△訓練期日 九月廿六日より十月五日に至る。

△訓練の統監 内務大臣として府統監は鈴木知事。

△実施要項 （準備訓練）は、九月廿六日から卅日の間に行はれ、監視及監視に伴ふ通信を味方飛行機によつて行ひ、警戒管制を布くが、空襲警報は発令せず、また消防防毒その他防護訓練を実施。（本訓練）は、十月一日より五日までの間に仮設敵飛行部隊の行動その他別に定める情況に即応して行ひ、訓練事項は監視通信及警報伝達、灯火管制、消防、防毒避難、救護その他諸般の防護訓練が実施されるが、警戒管制は準備訓練中から継続し、本訓練に入り、本訓練の期間中は状況に基かぬ勝手な訓練動作は絶対に禁ぜられてゐるから注意を要する。

△審判部 今度の訓練に初めて審判部が設けられることになり、統監は審判官を任命し訓練の監察を行ふが、審判官は府部長以下数名。

△音響管制並に交通管制 廿六日準備訓練が始まると同時に音響管制が布かれ、警報類似の音響は凡て禁止される、また防空上特に必要ある場所では交通管制が行はれ、自動車、発動機船等飛行機の爆音と類似の音響を発するものは、地上、水上の交通を、区域を限り制限することがある。

△飛行機の識別　準備訓練期間中は、参加飛行機は尾部に吹流（赤色、長さ約一米、中径約卅糶）を付し、これがない飛行機は訓練に関係のない飛行機である。本訓練間は尾部吹流ある飛行機は総て仮設敵飛行機で、これがついてゐないものはすべて味方の防空飛行隊である。

△仮設敵飛行部隊の空襲状況現示　機上から投下する擬爆弾は、爆弾（黄色石灰包）、焼夷弾（赤色石灰包）、毒瓦斯彈（青色石灰包）、瓦斯彈雨下（青色撒紙）、その他夜間は機上から綠色又は白色信号拳銃彈を併用、地上ではこの擬爆彈の落着位置を以て爆着位置と見做すを原則とするが、現地指導者がこれと併用して他に彈着点を設けることができる。なほ瓦斯は総て持久瓦斯とす。

△其他　飛行機は夜間翼燈を消燈せず、但し、都市防空圏内では、仮設敵飛行機はなるべく消燈する。飛行機が夜間不時着せんとする時は、信号彈（赤吊星）數發を發射するか又は翼燈を点滅し、飛行機が不時着せんとした時、或は不時着したのを發見した時は、速かに警察署又は府庁へ通知すること。」

準備訓練期間中は警戒管制のもと音響管制がしかれ、本訓練に入ると實際に擬裝敵飛行機が飛來し、機上から擬裝爆彈、焼夷彈、毒ガス彈、瓦斯雨下（液狀毒ガスを散布すること）などが投下され、その状況に應じて地上における防空体制が機動的に対応すること、とくに警防団、町防護組が實戰即應の防衛を行うこととされた。また地上、水上の交通一部制限が行われることにもなった。

實際に、この第三次防空訓練がどのような影響を京都市中にもたらし、市民がどのように反応したか、二つの対照的な様子を、新聞記事から垣間見てみよう。一つは音治郎の居住する滋野学区東魚屋町の南隣の米屋町である。

「もんぺ姿凛々し 米屋町に婦人班生る

敵機の空襲に備えて完璧を期した防空陣、殊に町内の護りは婦人の手といふので、滋野学区防護分団では全市に駆け逸早く婦人班が組織され、今回の防護訓練には非常な活躍ぶりを示してゐるが、特に同学区油小路丸太町上る米屋町の防護組婦人班では、時局柄廢物利用のモンペを作り、班員五十余名は何れも白エプロンに色とりどりのモンペ軍手に地下足袋姐さんかぶりで、赤い防火用バケツ持つ手も凛々しく、お婆さんから娘さんまで訓練の第一線に起ち、防毒に、消火に或は救護などに、男子の防護団員に伍して活発な働きを示してゐる。

なほ、滋野学区では今回の防空訓練中には、全町の婦人班員にモンペを着用せしめることになつてゐる。」<sup>(50)</sup>

米屋町で婦人班が全市にさがけ組織され、全員が廢物利用で作つたモンペを着用し、白エプロン、軍手、地下足袋姿で、赤い防火バケツをリレーする姿が写真とともに報道され、滋野学区全体として防空訓練中にモンペの着用を夫人に義務付けていること、学区としての模範的な対応が賞賛されているのである。

その一方で、次のような市民の反応も報道された。交通管制に對する反応である。

「(前略)空襲警報と共に市電、市バス、タクシー群など一斉に立往生して警戒、市電停車場には学生やサラリーマンの群が忽ち増えて困つた顔が盛り上がり、牛乳やさん、新聞配達、工場へ出勤する職工さん達が、自転車を停められて悲鳴を上げる始末、京都では発表が遅れ交通管制のあることが一般に徹底してゐないのだ、警防団員が親切に理由話して整理に当たつたが、何しろ大変な騒ぎである、その中に東南の空からかすかに爆音、空襲警報があつてから二時間経つてゐるよく晴れた碧空に、吹き流しの赤色鮮やかな敵機だ、それも二機悠々上空を二回旋回し



て、爆弾、焼夷弾、毒瓦斯弾の雨を降らし、地上の対空陣地からガン／＼バリ／＼と高射砲、高射機関銃が盛んに咆え立て、白い弾幕に包まれた敵機は寸時にして元來た方角へ遁走した。

府統監部への報告によると、この空襲で、（堀川署）七時廿五分 東堀川松原上る、同卅五分 醒ヶ井松原上る、同四十分 東中筋松原上るへ毒ガス弾が、（西陣署）七時卅分 千本五辻下る軌道上に毒瓦斯雨下、（川端署）七時廿五分 新堀町孫橋北西角は焼夷弾が投下されたが、警防団、町防護組などが出動して敏速に処置してしまひ被害はなかった。かくして八時八分空襲警報は解除となり、交通管制も解除されて、朝の生産活動ははつと蘇った（後略）<sup>(51)</sup>。

空襲警報のなか、実際に擬装敵飛行機が飛来し市内各所に各種爆弾を投下し、その処理を当該の警防団、町防護組が対応した点に触れているが、空襲警報発令に伴う交通管制で大きな混乱があったことが報じられている。音治郎の行商もそのことで午前中の分を中止せざるを得なくなつて、日誌には素直に「困つた」と記しているのである。

この点に関して、府統監部の下村大佐の講評が掲載されている。

「前略）交通管制がよく徹底してゐなかつたので、学生が一番困つたようである。市民全体として工合の悪かつた点は、軍の言葉でいえば、情況の人になつてゐないことで、自転車が通行証持たず平気で疾走したり、歩行者が退避せずのん気に空を眺めてゐたのは、中部防衛司令部がこの訓練に狙つたのを外すこと甚しく、今後指導者側で注意を要すること、思う（後略）<sup>(52)</sup>。」

「情況の人」になつていない市民の様子が垣間見られる。制限を無視して自転車走らせる市民、運行を停止した市電の停車場で、学生やサラリーマンたちがあふれかえっている様子、牛乳配達、新聞配達、工場へ出勤する職工たちが、自転車停められて不満をいつている様子、さらには擬装敵機が襲来し擬装爆弾を投下していったにもかかわらず、のんびりと空を見上げ見物する様子など、その混乱のなかで立ち往生する音治郎の姿が浮かんでくる。

### おわりに

本稿では、豆腐製造と行商を家業とする入山音治郎という人物の書き残した昭和二三(一九三八)年の「家計日誌」を素材に、日中戦争期の「高揚」のなか、京都市中の一家族がどのような生活をおくっていたのかを明らかにすることができた。それは、「生きる」「楽しむ」「交流する」「支える」という日常の家族と地域コミュニティの側から戦争を見据えることでもあった。

昭和二三(一九三八)年という年は、文字通り「いけいけドンドン」の戦況を示していた年であり、少なくとも当時の日本人にはそう知らされていた。その状況下で、徐々に戦争が日常化し、日常が戦争化していく姿、言い換えれば、戦争が生活のなかに浸透し、戦争を常に意識しつつ生活を営む家族や地域の姿を明らかにしたのである。

この年、京都市中の年中行事といわれるものはおおむね執り行われてきた。節分(二月)、都をどり(四月)、鴨川踊り(五月)、葵祭(五月)、今宮祭(五月)、祇園祭(七月)、大文字送り火点火(八月)、えびす講(一〇月)、時代祭(一〇月)、天神市(毎月二日)、弘法市(毎月二五日)、そして、町単位でおこなわれる御千度参り(四月)などである。

しかし、防空訓練のため大文字送り火は八月末の二八日に延期され、都をどりや鴨川踊りの演目が大幅に変更され

たりしたことを考えると、京都市民の生活のリズムを作り出す年中行事も、戦時下における戦争の日常化のもとで、徐々にその「高揚」の渦に吞み込まれ始めていったといつてよいだろう。それでも、それぞれの賑わいは相変わらずであったという。

われわれは、戦時下にあつても、かくもしたたかな庶民の生活を見るにつけ、戦争をただの戦史や国家史の流れのなかでのみとらえるのではなく、戦時という状況のもとで生活する人々の日常のなかから戦争をとらえる、すなわち庶民の側から戦争をとらえること、そこにこそ戦争のリアリティが存在することを銘記しなければならない。

## 註

(1) 克太良の妻である武子によれば、山田安之助家は同じ東魚屋町内、上京区樫木町通り小川東入ルに居住しており、魚の小売業を生業にしていたという。

(2) 木花家は、武子によれば東魚屋町が所有していた家屋（樫木町通西洞院西入ル三軒目）に居住し、魚の卸問屋を生業としていた。ちなみに兼子の死去後、その姉であるしづ（静）が木花家に入嫁した。

(3) 昭和四（一九二九）年四月一二日に婚姻届を出している。

(4) 以上の記述において出典を注記していないもの、たとえば、それぞれの出生、本籍地、婚姻先、養子先などについては、現当主の入山貴之氏、その母にあたる入山武子氏からの聞き取りと、同家所蔵の戸籍簿、除籍簿、過去帳などに基づいている。

(5) 昭和一一（一九三六）年の日記帳も入山家には残されていた。ただし、この日記帳は、同年にとどまらず、それ以降の年の日記やメモ、手習い、さらには手紙の下書き用としても使用されており、記述がどの年のものか、いくつかを除いて確定することがかなり困難であった。しかし、そのなかでも音治郎の弟泰三が召集令状を受け取り、戦地に赴くまでの行程を記述した部分がある。次にあげておこう。

## 「召集令

昭和十二年八月廿五日午前五時卅分召集令状拝受す、入山泰三に重大任務降下、十二年九月三十日午前十時三十分自宅出立す、滋野小学校十一時出發、御所建礼門前にて皇居を拝し、堺町御門前にて自働車<sup>オートカー</sup>に上車、伏見九聯隊前にて小息の後、午後一時入営す、和一郎も同時に同じ<sup>同じ</sup>泰三、九月六日午後三時桃山駅<sup>トヤマ</sup>上車出發、同日午後六時頃大阪に下車、大阪北久宝寺町五丁目八木敬介氏宅に宿泊、七日同しく八木氏宅、翌朝八時久宝寺校に集合、九時出立、九時三十分四ツ橋にて電車<sup>電車</sup>上車、大阪川口天保山午後六時出<sup>出</sup>ばをす  
九月十三日支那<sup>支那</sup>海灣太沽<sup>天津</sup>に上陸、□津浦浦線により南下す<sup>天津</sup>

(6) 『京都の歴史』第九卷「世界の京都」(昭和五十一年三月 学芸書林) 一〇四頁参照。

(7) 林宏樹『京都極楽銭湯案内』(平成一六年二月 淡交社) 一二五頁より引用。

(8) 同『京都極楽銭湯読本』(二〇一一年四月 淡交社) 九七頁、九九頁より引用。

(9) 『京都日出新聞』昭和十三年二月一日付夕刊記事。

(10) 昭和十三年二月二日付夕刊記事。

(11) 『京都日出新聞』昭和十三年一〇月一日付朝刊記事参照。

(12) 葵祭について、その挙行を「伝統床しい勅祭上・下両賀茂神社の賀茂祭(葵祭)は十五日平安朝の雅麗をそのまゝ、いと厳かに執り行われた」と伝えている。(『京都日出新聞』五月一五日付夕刊記事参照。)

(13) 『京都日出新聞』昭和十三年八月二八日付夕刊記事。

(14) 同前参照。

(15) 昭和十三年十一月四日付朝刊記事。

(16) 同志社高等女子部の歴史に関しては、『同志社百年史』通史編二(一九七九年二月 学校法人同志社)、宮澤正典『同志社女学校史の研究』(二〇一

年 思文閣出版)を参照。

(17) 宮澤前掲書二五八―二五九頁参照。

(18) 昭和十一年 入山家「当用日記」参照。

(19) 昭和十三年二月二六日付夕刊記事参照。

(20) 上京区東堀川通上長者町東北角、明治四一(一九〇八)年二月九日に開設。田中泰彦編『西陣の史跡 思い出の西陣映画館』(一九九〇年九月 京を語る会) 参照。

(21) 上京区西堀川通上長者町西南角、大正一五(一九二六)年頃は永楽館という寄席であったが、昭和初期に改装して常盤館という名にあらため映画館となった。同前参照。

(22) 一〇日の夜店として『京都日出新聞』(昭和三年四月一〇日付夕刊記事)に、金比羅(榎木町通室町西南)と安井金比羅(東大路通四条南)の二か所が掲載されているが、子どもたちだけのことを考えれば、歩いて五分ほどの榎木町通室町西南で開かれていた夜店に行つたと考えるのが順当である。

(23) 官聲教育開学百周年記念事業実行委員会『京都府官聲教育百年史』(昭和五三年三月)、文部省『特殊教育百年史』(昭和五三年一〇月)、藤本文朗・藤井克美『京都障害者歴史散歩』(一九九四年八月 文理閣) 参照。

(24) 日誌には記述がないが、七月一七日の山鉾巡行、神幸祭、二四日の還幸祭は挙行されている。『京都日出新聞』昭和十三年七月一七日付夕刊、一八日付朝刊記事参照。一七日付夕刊の記事は、「祇園囃し賑か 練る絢爛の山鉾 四条通りは人の渦」と題しその賑わいの様子を伝えている。

(25) 一六日の点火取り止めに關しては『京都日出新聞』(昭和十三年八月七日付夕刊)に「消える京情緒 大文字も管制 宮津の燈籠流しも取り止め 一千年の伝統侘し」という見出しで報じられている。そして二八日の点火については、同月三一日付朝刊で「英霊に捧ぐ 聖火燃ゆ 伝統の大文字」という見出しで報じられている。

(26) 京都市及接統町村地籍図付録 第一編 上京区之部(大正元年一〇月) 参照。

- (27) 『角川日本地名大辞典 第二六卷 京都府 上巻』(平成三年九月 角川書店)『史料 京都の歴史 第七巻 上京区』(昭和五五年三月 平凡社)参照。
- (28) 秋山國三『近世京都町組発達史』(新版 公同沿革史) (一九八〇年 法政大学出版局) 参照。
- (29) 『京都の歴史 第八巻 古都の近代』(昭和五〇年三月 学藝書林) 三〇頁参照。奥田以在「近代京都『町』における家持自治の転換―東玉屋町、仲之町を事例として―」(同志社大学人文科学研究所『社会科学』第七六号所収)、同「近代京都山鉾町における紛擾と自治」(社会経済史学会『社会経済史学』第七六卷第一号所収) 参照。
- (30) 『史料 京都の歴史 第七巻 上京区』(昭和五五年三月 平凡社) 参照。
- (31) 同前参照。
- (32) 『京都の歴史 第九巻 世界の京都』(昭和五一年三月 学藝書林) 一〇〇頁より引用。
- (33) 昭和十三年三月一八日付朝刊記事。
- (34) 同前記事より引用。
- (35) 『京都日出新聞』昭和十三年六月二日付朝刊記事「けふから徴兵検査」参照。
- (36) 同前記事参照。
- (37) 昭和十三年四月二日付朝刊記事より引用。
- (38) 昭和十三年二月一八日付夕刊記事より引用。
- (39) 『京都日出新聞』昭和十三年五月一日付朝刊、同年同月一日朝刊付記事参照。
- (40) 昭和十三年三月三日付朝刊記事より引用。
- (41) 『京都日出新聞』昭和十三年八月二四日付朝刊記事より引用。
- (42) 昭和十三年三月三日付朝刊記事より引用。

(43) 『京都の歴史 第九卷 世界の京都』（昭和五十一年三月 学藝書林）一〇二頁参照。なお、防空法に関しては、水島朝穂・大前治「検証 防空法——空襲下で禁じられた避難」（二〇一四年二月 法律文代社）参照。

(44) 昭和十三年四月一五日付夕刊記事より引用。

(45) 『京都日出新聞』昭和十三年四月二二日付夕刊記事「二秒も早く、正確に 水も漏らさぬ伝達網 中部防空演習の第一日」参照。

(46) 昭和十三年六月三〇日付夕刊記事参照。

(47) 昭和十三年七月一三日付夕刊記事より引用。

(48) 『京都日出新聞』昭和十三年七月一三日付夕刊記事より引用。

(49) 昭和十三年九月九日付夕刊記事より引用。

(50) 『京都日出新聞』昭和十三年一〇月二二日付朝刊記事より引用。

(51) 同前より引用。

(52) 同前より引用。

（付記）本稿で素材とした「家計日誌」は、西村卓演習で「豆腐行商から見た生活都市・京都」を卒業研究（二〇〇九年度）のテーマにしたグループ（飯島輝、西川奈緒、岡本圭浩、柴田悠一朗、田丸順之、米澤理恵子）がフィールドワークの途上で発見した史料である。

なお、本稿は、平成三十三年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金 基盤研究（C））研究題目「近代京都における住民自治組織Ⅱ」「町」の基礎研究」による助成をもとにした成果の一部である。

（にしむら たかし・同志社大学経済学部教授）

Abstract

Takashi NISHIMURA, *The Life of a Tofu Peddler in the Japan-China War Period*

In this paper, based on a diary that a tofu peddler in Kyoto wrote in 1938 during the Japan–China war, I reproduced the daily life of one family living in a community under war. By doing so, I believe that I revealed the realities of war.